

# 塾の交友関係

杉 江 修 治  
伊 藤 篤  
青 木 滋 昌

## 問 題

### 1. 児童の交友関係の近年の特徴

#### (1) 児童期における交友関係の意義

個人の自我の十全な発達にとって、Mead (1934) は、「ある社会的全体もしくは組織化された社会の広範な諸活動をその全体に参加し内包させられている個人個人の経験の領域に移入することこそ」「不可欠の土台」（稲葉他訳 p.166）とのべている。自我発達の過程、とくに児童期では、彼らの属する集団、それも比較的近い年代の者からなる仲間集団が、社会の一員としての適応的自我の発達に及ぼす影響は大きいものと考えられる。

より具体的には、例えば藤本 (1974) は、仲間集団の発達に及ぼす役割として、①子どもの自立、独立に対して積極的な意味をもつ、②社会的ルール、個人の果すべき役割や責任を学習する上で、基本的な重要性をもつ、③学校や家族とは違った、対等な立場でのつき合い方を教える、④自発性と自治の能力を育成する、といった4点をかかげている。深谷・深谷 (1976) は、①身体的、運動的発達、②社会性の発達、③情緒安定化、④自発性、自主性の獲得、⑤知的能力の開発を、仲間集団での遊びの機能として示している。又、今津・浜名・作田 (1979) は、①社会的自我の形成、②「協同の規則」の内面化をあげている。さらに、古畑 (1983) は、自己主張や自己制御の仕方、感受性の養成、役割の自覚、協同・競争の仕方、判断、行動の基準の形成など、仲間・友人の役割を数多く列挙している。児童期の交友関係の発達期における重要さはこのように具体的にも多面的に

指摘されるのである。

さて、このような役割を果しうる仲間集団の形成は、小林(1968)によれば、小学校4年生頃がその初期であり、5～6年生に至り最盛期となる。中学生ではやや仲間遊びが減少する。ただし、この傾向には単なる発達的变化だけでなく、受験を中心とした社会的要因の関与も考えられる。小林の調査時と、益々受験熱の高まった近年との間で、児童の交友関係に変化がみられることは予想しうる。しかしながら、いずれにせよ、この小学校高学年は、交友関係の実態面で最も興味深い年代なのである。

## (2) 児童の交友機会の現状

我国の児童の勉強時間は欧米各国の児童に比べて長い傾向にあり、又遊んでいる時間は欧米各国の児童に比べて短く、その過ごし方もバラエティに乏しいことが報告されている(総理府青少年対策本部 1981)。斎藤(1983)は「子ども社会の変容」について、それはおとな社会の高度成長期の変容が子どもに新しい社会関係をつくることを強い、その内容が地域ごとの遊び集団からテレビを中心とした大人からの働きかけの下への移動であったと述べている。形態の上からは、集団的形態から個別的形態へと変化したのである。

深谷・深谷(1976)のあげる現代の子どもの遊びの特徴のうち、仲間集団にかかわるものとしては、①行動半径の縮小、②グループサイズの縮小、③グループの等質化がある。この中でもグループの等質化、すなわち異年齢の者の混在した集団の減少は各所で論じられている(藤本 1974, 千石・飯長 1979)。河合・高塚・楢木・佐竹(1983)は、現代の学生気質を論ずる中で、大学生は学年1年の差でなかなか会話ができないといった現象をのべている。こういった現象には深谷・深谷(1970)の指摘する、学校文化の支配性の大きさ、すなわち同学年、同クラスを主体とした仲間集団が主流となり、地域の仲間集団が減少するといったことによる、異年齢集団での活動経験の乏しさに一因を求めることも可能であろう。

異年齢集団は竹之下(1953)のいう「自然発生的集団」では減少してきている。しかし一方、ボーイスカウト、カブスカウト、地域子ども会、児

童館, クラブ活動, 部活動といった「組織的集団・クラブ」では, 異年齢間の交流の機会はない訳ではない。ただし, 後者は「大人の指導と管理・監督のもの」(住田 1976) であり, 仲間集団の役割, 機能として先にかかげた内容を十分に果すものかどうか, その運営の仕方にもかかわる問題であるが, 前者とは異なる所の多い活動であろう。

## 2. 塾と児童の交友関係

### (1) 児童の交友関係に果す塾の役割

児童の通塾率の高まりはしばしば指摘される所である(文部省大臣官房調査統計課 1978, 千石・飯長 1979, PHP研究所 1979, NHK放送世論調査所 1980)。こういった傾向の中では, 児童の生活に塾が及ぼす影響について, さまざまな形で把握する必要があるだろう。塾を単に必要悪的に捉えるのではなく, 多面的な吟味を行なう必要がある。「稽古ごとや塾が, 子どもの生活を豊かにする一助になっているか, 子どもから生き生きした生活をうばっているか, 慎重に考える必要がある (p. 84)」(千石・飯長 1979) という接近こそ望まれるであろう。

深谷・深谷(1976)は, 単位時間内にクラスの何%の子どもが通塾によって「身柄を拘束」されているかを組織的に調査した結果を報告している。これによると, たとえ1人1人の児童の通塾時間は, 週あたり短くとも, 毎日学校が終るやいなや, 夜8時まで, 多い時間だと4割近くの児童が塾通いをしている。児童がまとまって遊んだり, 活動しようとしても, 必ずだれかが塾に行き行って抜けているという事態が現出しているのである。こういった分析からは, 塾が仲間づくりに対しては阻害的に働いていることが指摘されているのである。

しかし一方, 塾に児童の交友の場としての積極的な意義を認める発言, 又は調査資料も多くある。たとえばPHP研究所の調査(1979)では, 「習いごとや塾で楽しいこと」という質問に対して「友達に関すること」が第3位(回答者の16.2%)にあげられている。又村上(1976)は, 珠算塾, 学習塾共通に, その面白さ, 楽しさを子どもにたずねれば「一番端的に出てくるのは, 友達と遊べるということです (p. 8)」とのべ, さらに珠算塾

指導者の大森・大森(1968)でも「そろばん塾は社交の場であり、仲間づくりの場でもあります(p.39)」という指摘を、調査資料を根拠にして論じている。斉藤(1983)の「塾は子どもたちにとって遊び場、社交場といった側面があるのです。放課後友だちと定期的に会うことができ、勉強のまえとあと、それから行き帰りにいっしょに遊べる機会が保障されるというのは、現代の子どもにとっては魅力です(p.38)」という学習塾指導の経験に基づく指摘も先と同様の意義をもつものである。さらに、その塾での交友関係は「学校のきまりきった友だちとは違った友人(伊藤 1982 p.4)」である場合が可能でもあるのである。

塾は学習、訓練の時間の増加につながり、その分遊ぶ時間の減少をみる事は確かであろう。しかし一方で、学校とはちがった地域の仲間関係、それは異年齢の成員をふくんだ自然発生的な集団となる可能性をもつものが成立しうる場面でもあるのである。総理府広報室の調査(1978)では、友達を得たきっかけとして塾、けいこごとがあげられるのは5.8%にすぎない。しかしながら学級中心の現状に対して、上述のように、何かプラスしうる面をもつという意味で、この数値以上の実際的機能をもちうるものとして塾を考える必要があるだろう。

## (2) 塾における異年齢交友の可能性

学習塾や珠算塾などは多くの場合(特別な進学塾を除いては)、その所在する近辺の児童生徒を塾生としている。同じ学区に複数の塾があり、出入りはあるだろうが、その内の近い塾に通うことが多い。その故に学校内とはちがった交友関係、それも地域に関係した交友関係が成立しうる基礎がそこにあると考えられるのである。又、学区にまたがる中間地点の塾では、学区をこえた友人関係の成立も期待できるであろう。

多くの塾では又異年齢交友の可能性をもつ指導形態をとっている。文部省大臣官房調査統計課の調査(1978)では、小学生対象の学習塾のうち20%程度(国語18.4%、算数17.0%、英語20.9%)が2以上の学年を組み合わせたクラス編成を用いている。又珠算塾では珠算の技能別編成の有効性が広く認識されており(遠藤 1980)、複数学年の者を対象とした指導が一

般化している。珠算塾での異年齢集団の成立可能性については葛巻 (1974), 村上 (1976) にも着目する所である。

異年齢集団, いわゆるタテ型の児童集団は, 子ども間での文化の伝承に, 社会に適応してゆくための技能・知識習得のために不可欠な条件である。又, 遊び, 生活における安全面でも, 同年齢集団には不安がある。以上の検討から, 自然発生的なタテ型の仲間集団形成の, 現代では数少ない機会が塾にあるのではないかと予想する事に無理はないであろう。

### (3) 塾にとっての交友関係の意義

通塾動機を親に質問した場合, 第一にあげられるのは実利的理由である (安藤他 1963)。又, 塾の指導者自身も知識・技能面以外の教育目標としては個別的な「しつけ」のみをかかっているケースも多いように思われる (たとえば阿部 1979)。

しかしながら, 児童が通塾を決心する動機として, 見おとしてならない重要なことがらとして, 友人との関係, すなわち「友だちにさそわれて」とか「友だちも通っているから」といった友人関係面がある (山崎 1982)。諸調査によっても, この理由は高い割合をしめている事が分る (西川 1959 1位 47%, 曾我 1961 3位 25.2%, 赤沢 1972 2位 23%, 原田他 1980 2位 22%)。

さらに, 塾内の児童間の人間関係のよしあしが塾への適応に関係していることをうかがわせる資料もある。安藤他 (1961) では「珠算を習いはじめていやだと思ったこと」を調査しているが, 「友だちが授業中に話しかける」, 「上級生がいじめる」といった項目が中であげられており, 又, 曾我 (1961) もけんか, やかましい, 友だちがいないなどの項目を塾でのいやな事の中味として見出している。

児童間の仲がよすぎる事も, 遊び中心的な活動をひきおこし, 学習効果を妨げる要因となる。又とげとげしい一触即発といった対人関係の中では学習効果のあがらない事も確かである。その意味で塾における児童間の交友関係調査は塾教育のうえで十分に配慮されるべき問題といえるであろう。

なお, 学習指導の過程では, 常に技能, 知識の習得のみを志向する事が

必ずしも効果をあげる最良の条件とは限らない。むしろ同時的にさまざまな態度的側面を指導することにより、技能、知識の習得にも積極的な成果が期待される事は小集団指導の諸研究ですでに明らかにされてきている（塩田・阿部 1962, 塩田・横田 1981）。このことは塾でも例外ではない。態度指導は対人関係や学習への構えをはじめとする多様な内容をふくむものである（杉江 1982 a, b）。指導内容、指導ステップに応じた態度指導を配慮する事が、塾の教育においても大切であろう。そして交友関係面への着眼と指導はその重要な側面となっているのである。

なお、塾における交友関係の実態については、組織的な研究はわれわれは見出すことができなかつた。この領域の資料を増す必要があるのである。

### 3. 児童の交友関係の研究

児童の交友関係の実態を調査したものは古市（1948）、小室（1949）、阪本（1949）、田中（1949）、石黒（1951）、末利（1955）などがある。又、その変動を扱った研究としては大西（1949）、依田他（1954）、亀井（1963）、上田（1964 a, b, 1965）等をあげることができる。多くはソシオメトリックな手法を用いたものである。これらの研究は、児童社会の変化が指摘されている中では、継続的に調査され記述、比較されるべき資料が報告される必要がある。しかしながら、ソシオメトリックな手法の学校教育場面での定着ということも手伝ってか、ことさら交友関係の記述的研究を報告するという事例はほとんど近年ではみられなくなっている。

一方、異年齢交友についての調査的研究も少ない。われわれの入手した資料は内山（1953）、小林（1968）、指定都市教育研究所連盟（1976）、総理府青少年対策本部（1977）、岡村他（1977, 1978）、PHP研究所（1979）、NHK放送世論調査所（1980）の諸研究であった。それぞれ実施の年代、研究対象に違いがみられ、この領域の研究が組織的に行われているとはいえない現状があるように思われる。

### 4. 本研究の目的

本研究では、珠算塾、学習塾に通塾する児童に対して、ソシオメトリックな手法による交友関係調査を行なった。その資料によって、塾（珠算塾

と学習塾一補習塾)での交友関係を、学校内の交友関係や放課後又は休日での学校外の交友関係との比較で検討し、その特徴を明らかにしようとするのが本研究の目的である。

資料は「学校内の仲良し関係」、「放課後、休日等の学校外の仲良し関係」、「塾での仲良し関係」、「塾での教え合い関係」の4つの基準それぞれについて、「クラスの異同」、「在学校の異同」、「学年」、「性別」、「(選択の)理由」を5人選択制限のもとで集めたものである。分析、考察は次の諸点にわたる。

(1)選択基準の違いによる交友関係の差異——4つの基準それぞれについて次の諸点で比較が可能である(ただし塾はさらに珠算塾と学習塾とに分れる)。

①選択人数の多寡——5人制限での選択であるが、それ以下の人数記入しか行っていない者もいる。何人が友人として選ばれたかを0～5の範囲で比較することができる。

②被選択者の属性——どのような者が選ばれたかを、クラスの異同、学年、性別で比較できる。又学校内を除く基準では、別の学校に通う者も対象となり得る。学年については異年齢間交友の視点からも重要な分析のポイントといえるであろう。

③被選択者の一致度——各基準を通して被選択者がどの程度一致しているのか、実際に名前をつき合せることによって分析できる。

④選択理由——選択理由についても、各基準で変化があるかどうか、大きく4カテゴリーに分けた理由(「相互的接近」、「同情・愛着」、「尊敬・共鳴」、「集団的協同」——田中, 1975 による)について比較する。

(2)各選択基準毎の交友関係の特徴——学校内交友関係については近年の特徴を記述したものは見あたらない。本研究では塾に通う児童を対象とし、調査場所も塾内という限定はあるが、学校教育上でも一定の有意味な資料となるであろう。学校外、塾(珠算塾、学習塾)の交友関係についても、その特徴を(1)の検討をふまえてまとめたい。

(3)被選択者の属性別選択理由の比較——選択理由については被選択者の属性別の検討もあわせて行なった。学校、クラス、性、学年の別での比較

による属性別の資料を得ることができるであろう。

(4)塾間の比較——珠算塾は技能習得を中心とする塾である。一方学習塾は知識習得を中心とする塾である。この目的の異なる塾間での交友関係の相違についても，得られた資料の分析を行なう。これにより塾としての機能の一般的な特徴や，又目的別の塾間の相違などが，交友関係に限ってではあるが明らかにされるであろう。

方 法

**被調査者** 小学校5，6年生の，珠算塾，学習塾（補習塾）への通塾者で，通塾期間が半年以上の者を対象とした。被調査者の内訳は，表1に珠算塾調査，表2に学習塾調査の対象を，塾別，学年別，性別，通っている

表1 被調査者内訳（珠算塾）

塾名		塾 A		塾 B		性別		学年別	合計
小学校名		a	b	a	c	合計		合計	
5年生	男	14	27	16	0	57		120	175
	女	15	23	25	0	63			
6年生	男	12	11	8	1	32		55	
	女	11	6	6	0	23			

表2 被調査者内訳（学習塾）

塾名		塾 X						塾 Y			塾 Z			性別	学年別	合計	
小学校名		n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	合計		合計
5年生	男	学校別	4	4	1	0	0	0	0	6	0	2	6	9	5	37	67
		計	9						8			20					
	女	学校別	5	2	0	1	1	0	0	6	1	1	6	7	0	30	
		計	9						8			13					
6年生	男	学校別	15	5	0	0	1	3	0	12	1	1	0	0	0	38	56
		計	24						14			0					
	女	学校別	7	4	0	1	1	0	1	4	0	0	0	0	0	18	
		計	14						4			0					



学校別に示した。

なお、調査を実施した珠算塾は、2塾ともに愛知県半田市内にある。又、学習塾は、愛知県小牧市、木曾川町、弥富町にそれぞれある。すべて名古屋市近郊の中都市ないしはその周辺地域である。

表3 塾の指導実態(珠算塾)

		A 塾	B 塾
指・ 導日 時 間 数	指 導 形 態	能力別	能力別
	1回の指導時間	55分	55分
	週あたり回数	5回	4回
	年間指導日数	約 250日	約 200日

珠算塾、学習塾といっても、塾によりその指導内容等は多様である。本調査を実施した各塾について、その扱う教科(学習塾のみ)、指導形態、指導時間について、表3、表4に示した。

表4 塾の指導実態(学習塾)

		X 塾	Y 塾	Z 塾
指 導 対 象 教 科		小5：国・算・ 小6：国・算・ 英	小5, 小6： 国, 算, 理, 社, 英	小5, 小6： 国, 算, 理, 社, 英
指 導 形 態		学年別クラス 6年生のみ能力 別の導入	学年別クラス	学年別クラス
指・ 導日 時 間 数	1回の授業時間	小5, 小6：90分 (英は60分)	小5, 小6：90分	小5, 小6：60分
	週あたり回数	小5：2回 小6：3回	小5, 小6：6回	小5, 小6：6回
	年間指導日数	小5：約90日 小6：約130日	小5, 小6：約 260日	小5, 小6：約 275日

**調査内容** 次の4つの基準についてのニア・ソシオメトリック・テストを実施した。

基準1：学校でいつもなかよくしている人。

基準2：学校がおわってからとか、休みの日などにいつもなかよくしている人。

基準3：このじゅくでいつもなかよくしている人。

基準4：このじゅくの友だちで、おしえてあげたり、おしえてくれたり、れんしゅうや勉強のそうだんをしあったりする人。

各被選者それぞれに対して、その「学年」、「組」、「性別」、「選 択 理 由」の記入を求めた。質問の具体的様式は論文末に資料として示す。

選 択 理 由は13項目からなる選 択 肢から選 択 させた。各選 択 理 由は、「相互的接近」、「同情・愛着」、「尊敬・共鳴」、「集团的協同」、「その他」に分けられた。各選 択 肢がどの理由カテゴリーに分類されるかは論文末の資料にあわせて示した。

**手 続 き** 調査は各塾で行なり。本論文の共同研究者が実施者となり、集団形態で資料を集める。

**調 査 期 間** 1983年9月中旬。

## 結 果 と 考 察

### 1. 珠算塾について

結果は、珠算塾をはじめに検討し、つづいて学習塾の検討にうつる。その後両塾間の比較を中心とした総括的検討を加える。

#### (1) 通塾方法、通塾時間、被調査者の技能水準

まず、フェイスシートによる質問から、被調査者の塾への通塾方法、通塾に要する時間、さらに、何級の技能水準をもつものかを示しておく。

表5の通塾方法では徒歩が最も多く、3/4の児童がそこに入る。

表5 通 塾 方 法 ( )内%

	徒 歩	自 転 車	そ の 他
5 年 生	97 (80.8)	23 (19.2)	0 (0.0)
6 年 生	33 (60.0)	20 (36.4)	2 (3.6)
合 計	130 (74.3)	43 (24.6)	2 (1.1)

自転車通塾者は1/4と少ない。その他に至っては非常に少数である。歩いて通える程度の近隣からの通塾者が多くを占めていることが示されている。

これは次の通塾に要する時間(表6)によっても示される。10分以内の通塾者が3/4近くを占める結果であった。

表7には各被調査者の珠算の技能水準が示される。能力別を基本にして

表6 通塾時間 ( )内%

	0~5分	6~10分	11~15分	16~20分	21分以上
5年生	37 (30.8)	44 (36.7)	25 (20.8)	9 (7.5)	5 (4.2)
6年生	24 (43.6)	24 (43.6)	5 (9.1)	1 (1.8)	1 (1.8)
合計	61 (34.9)	68 (38.9)	30 (17.1)	10 (5.7)	6 (3.4)

表7 被調査者の技能水準内訳 ( )内%

	初段	1級	2級	3級	4級	5級	6級
5年生	0 (0.0)	3 (2.5)	15 (12.5)	49 (40.8)	49 (40.8)	3 (2.5)	1 (0.8)
6年生	1 (1.8)	4 (7.3)	17 (30.9)	25 (45.5)	8 (14.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	1 (0.6)	7 (4.0)	32 (18.3)	74 (42.3)	57 (32.6)	3 (1.7)	1 (0.6)

表8 被選択者数一学校内の交友関係 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	48 (84.2)	5 (8.8)	4 (7.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	49 (77.8)	8 (12.7)	4 (6.3)	1 (1.6)	1 (1.6)	0 (0.0)
	計	97 (80.8)	13 (10.8)	8 (6.7)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0.0)
6年生	男	31 (96.9)	1 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	23 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	54 (98.2)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	男	79 (88.8)	6 (6.7)	4 (4.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	72 (83.7)	8 (9.3)	4 (4.7)	1 (1.2)	1 (1.2)	0 (0.0)
	総計	151 (86.3)	14 (8.0)	8 (4.6)	1 (0.6)	1 (0.6)	0 (0.0)

いるとはいえ、通塾時間の制約等で多少異質な水準の者も入っている。5年生は3, 4級の者が多い。6年生は2, 3級の者が多く、5年生に比べて全体に技能水準が高い。

## (2) 被選択者数

調査では5人までの制限選択であるが、児童によっては5人に満たない人数しか記していない者も多い。被選択者が何人であったかを各選択基準について表8～表11にまとめた。

### a. 学校内の交友関係での被選択者数

表8によれば総計で86.3%の者が5人の制限枠一杯までの人数を記している。この傾向は5年生よりも6年生で強い。5年生では1人選択の者は約10%程度あるのに対して6年生ではそれが2%に満たない。しかし総じて5年生の少数の者を除いては、被調査者の学校内の交友関係は狭いものではないようである。なお、性差は小さい結果であった。

表9 被選択者数—学校外の交友関係 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	37 (64.9)	4 (7.0)	7 (12.3)	4 (7.0)	5 (8.8)	0 (0.0)
	女	21 (33.3)	15 (23.8)	14 (22.2)	5 (7.9)	6 (9.5)	2 (3.2)
	計	58 (48.3)	19 (15.8)	21 (17.5)	9 (7.5)	11 (9.2)	2 (1.7)
6年生	男	23 (71.9)	5 (15.6)	3 (9.4)	0 (0.0)	1 (3.1)	0 (0.0)
	女	15 (65.2)	3 (13.0)	4 (17.4)	1 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	38 (69.1)	8 (14.5)	7 (12.7)	1 (1.8)	1 (1.8)	0 (0.0)
合計	男	60 (67.4)	9 (10.1)	10 (11.2)	4 (4.5)	6 (6.7)	0 (0.0)
	女	36 (41.9)	18 (20.9)	18 (20.9)	6 (7.0)	6 (7.0)	2 (2.3)
	総計	96 (54.9)	27 (15.4)	28 (16.0)	10 (5.7)	12 (6.9)	2 (1.1)

## b. 学校外の交友関係での被選択者数

表9では、総計で54.9%の者が5人を、又4人、3人はそれぞれ15、16%程度の者が記している。又、少数ながら1人も記入していない者もいる。学年別には5年生に比べて6年生の方が多い人数を書く傾向が、たとえば5人選択の割合によってみられる。又、男子に比べて女子でその人数が少

表10 被選択者数—塾の交友関係 (仲良し) ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	42 (73.7)	4 (7.0)	6 (10.5)	3 (5.3)	1 (1.8)	1 (1.8)
	女	40 (63.5)	10 (15.9)	9 (14.3)	3 (4.8)	1 (1.6)	0 (0.0)
	計	82 (68.3)	14 (11.7)	15 (12.5)	6 (5.0)	2 (1.7)	1 (0.8)
6年生	男	27 (84.4)	3 (9.4)	1 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.1)
	女	15 (65.2)	3 (13.0)	4 (17.4)	1 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	42 (76.4)	6 (10.9)	5 (9.1)	1 (1.8)	0 (0.0)	1 (1.8)
合計	男	69 (77.5)	7 (7.9)	7 (7.9)	3 (3.4)	1 (1.1)	2 (2.2)
	女	55 (64.0)	13 (15.1)	13 (15.1)	4 (4.7)	1 (1.2)	0 (0.0)
	総計	124 (70.9)	20 (11.4)	20 (11.4)	7 (4.0)	2 (1.1)	2 (1.1)

ない傾向も認められる。その傾向は5年生でより大である。

## C. 塾の交友関係 (仲良し関係) での被選択者数

表10では、総計70.9%の者が5人を記入している。多くの者は3人以上の友人名を記入している。一方、1人も記入していない者も少数みられる。学年別では、男子で5年生より6年生の方がやや多い人数を記入する傾向が認められる。女子では学年差はみられなかった。性差については、男子の方がやや選択人数が多いように思われる点が指摘できる。

## d. 塾の交友関係（教え合い）での被選択者数

塾で教え合う関係ということでは、表11に示したように、選択人数は他

表11 被選択者数一塾の交友関係（教え合い）（ ）内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	18 (31.6)	5 (8.8)	9 (15.8)	13 (22.8)	6 (10.5)	6 (10.5)
	女	20 (31.7)	14 (22.2)	13 (20.6)	8 (12.7)	7 (11.1)	1 (1.6)
	計	38 (31.7)	19 (15.8)	22 (18.3)	21 (17.5)	13 (10.8)	7 (5.8)
6 年生	男	20 (62.5)	2 (6.3)	1 (3.1)	5 (15.6)	3 (9.4)	1 (3.1)
	女	10 (43.5)	2 (8.7)	4 (17.4)	3 (13.0)	3 (13.0)	1 (4.3)
	計	30 (54.5)	4 (7.3)	5 (9.1)	8 (14.5)	6 (10.9)	2 (3.6)
合 計	男	38 (42.7)	7 (7.9)	10 (11.2)	18 (20.2)	9 (10.1)	7 (7.9)
	女	30 (34.9)	16 (18.6)	17 (19.8)	11 (12.8)	10 (11.6)	2 (2.3)
	総計	68 (38.9)	23 (13.1)	27 (15.4)	29 (16.6)	19 (10.9)	9 (5.1)

の基準と比べて減少する。すなわち総計で38.9%が5人を、そして4人～1人までは10～17%程がそれにあてはまる。0人は5.1%であった。学年差は6年生で選択人数が多い傾向としてあらわれた。性差は5年生ではみられないが、6年生では男子の方が多く選択をする傾向を示した。

## e. 各基準間の応答の相違

学校内の交友関係，学校外の交友関係，塾の交友関係（仲良し）の3基準はともに各事態での仲良し関係を質問しているという事で共通した部分がある。

そこでは学校内の友人が最も多く想起される傾向があった。一方，塾の交友人数は学校内に比べて少ないが，学校外の基準に比べると多い傾向が認められる。これは調査の場面が塾内で，友人の想起が容易だった事も一

つの要因であろうが、少なくとも、学校内に準ずる数の友人が記入された事は、塾での交友機会が希少なものではないことを示しているといえるだろう。

塾の2基準すなわち仲良しと教え合いとでは明らかに仲良し関係の方が選択人数が多い傾向であった。

なお、各基準通してほぼ一貫して5年生より6年生が、そして女子より男子が多人数の友人を記している傾向が認められたのである。

### (3) 被選択者の内訳

各被調査者の選択した者を、①学校が同じか否か、②学年が同じか否か、③クラスが同じか否か、④同性か異性かの4つの属性について分けて示したのが表12から表15である。先の人数の検討に加えて、友人の質的な側面にわたる検討が、これによって可能となる。

#### a. 学校内の友人の属性

表12 被選択者の内訳——学校内交友関係 ( )内%

		同 学 年				異 学 年			
		同クラス		異クラス		上 級		下 級	
		同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5 年 生	男	203 (74.9)	0 (0.0)	48 (17.7)	0 (0.0)	8 (3.0)	0 (0.0)	12 (4.4)	0 (0.0)
	女	203 (69.8)	1 (0.3)	71 (24.4)	1 (0.3)	3 (1.0)	0 (0.0)	12 (4.1)	0 (0.0)
	計	406 (72.2)	1 (0.2)	119 (21.2)	1 (0.2)	11 (2.0)	0 (0.0)	24 (4.3)	0 (0.0)
6 年 生	男	99 (62.3)	2 (1.3)	53 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (3.1)	0 (0.0)
	女	69 (60.0)	4 (3.5)	33 (28.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (7.8)	0 (0.0)
	計	168 (61.3)	6 (2.2)	86 (31.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (5.1)	0 (0.0)
合 計	男	302 (71.6)	2 (0.5)	101 (23.9)	0 (0.0)	8 (1.9)	0 (0.0)	17 (4.0)	0 (0.0)
	女	272 (67.0)	5 (1.2)	104 (25.6)	1 (0.2)	3 (0.7)	0 (0.0)	21 (5.2)	0 (0.0)
	総計	574 (68.7)	7 (0.8)	205 (24.5)	1 (0.1)	11 (1.3)	0 (0.0)	38 (4.5)	0 (0.0)

学校での仲よし関係では、総じて同学年・同クラス・同性の者が最もよく選ばれることが表12に示されている。それについて同学年・異クラス・同性の者が多く選ばれている。異性が選ばれる割合は皆無ではないが、全被選択者の1%にもみえない数であった。又異学年（5年生は上級, 下級, 6年生は下級に限られる）の選択は全被選択者中の6%弱とこれも少ない数であった。

5年生と6年生とでは、5年生の方が同学年・同クラス・同性の者を選ぶ割合が多く、6年生ではその割合がやや低下した。一方、同学年・異クラス・同性の者を選ぶ割合は6年生の方が大きい傾向がみられた。年齢に伴う交友関係のひろがり示唆する結果であった。性差は多少はみられたが、大きいものではなかった。

#### b. 学校外の友人の属性

放課後や家に帰ってからの友人も、総じて同学校・同学年・同クラスの同性の割合が大きい傾向がみられる（表13）。それについて同学校・同学年・異クラスの同性の割合が大きい。学校外では同学校・同学年・同性の友人との交友が最も多いことが示されたのである。

一方、異学年との交友は、同じ学校の者が15%弱、別の学校の者を含めて20%ほどが選ばれている。友人の5人に1人は異年齢の者ということになる。上級, 下級の別では、前者が6%, 後者が14%程となる。この差は小学校という学校の区切りにより、6年生がさらに上の年齢の者と交わる事が少ないことに多くは起因していると思われる。ただし5年生でも下級生との交わりの方がやや多い。

学年別には、5年生で同学校・同学年・異クラス・同性の者を選ぶ割合が6年生に比べてやや少ない傾向がみられた。少ない割合だけ異年齢交友に選択がなされている。性差は顕著でなかった。

異性の選択は少数であったが、その多くは下級生であった。別の学校から選ばれたのは6.4%であり、その中では上級生・同性の割合が大きいものであった。



表13 被選択者の内訳—学校—交友関係 ( )内%

	同 学 年						同 学 年						同 学 年					
	同クラス			異クラス			上 級			下 級			上 級			下 級		
	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	
	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	
5年生	男	125 (52.1)	0 (0.0)	65 (27.1)	0 (0.0)	12 (5.0)	0 (0.0)	27 (11.3)	2 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)	3 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	101 (45.7)	0 (0.0)	52 (23.5)	0 (0.0)	9 (4.1)	1 (0.5)	25 (11.3)	7 (3.2)	2 (0.9)	2 (0.9)	11 (5.0)	1 (0.5)	8 (3.6)	2 (0.9)	2 (0.9)	2 (0.9)	
	計	226 (49.1)	0 (0.0)	117 (25.4)	0 (0.0)	21 (4.6)	1 (0.2)	52 (11.3)	9 (2.0)	5 (1.1)	2 (0.4)	14 (3.0)	1 (0.2)	11 (2.4)	2 (0.4)	2 (0.4)	2 (0.4)	
6年生	男	69 (47.9)	0 (0.0)	59 (41.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (6.9)	1 (0.7)	3 (2.1)	0 (0.0)	2 (1.4)	0 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	44 (44.0)	0 (0.0)	39 (39.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (10.0)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.0)	0 (0.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	
	計	113 (46.3)	0 (0.0)	98 (40.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (8.2)	2 (0.8)	3 (1.2)	0 (0.0)	6 (2.5)	0 (0.0)	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	
合計	男	194 (50.5)	0 (0.0)	124 (32.3)	0 (0.0)	12 (3.1)	0 (0.0)	37 (9.6)	3 (0.8)	6 (1.6)	0 (0.0)	5 (1.3)	0 (0.0)	3 (0.8)	3 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	145 (45.2)	0 (0.0)	91 (28.3)	0 (0.0)	9 (2.8)	1 (0.3)	35 (10.9)	8 (2.5)	2 (0.6)	2 (0.6)	15 (4.7)	1 (0.3)	9 (2.8)	3 (0.9)	3 (0.9)	3 (0.9)	
	総計	339 (48.1)	0 (0.0)	215 (30.5)	0 (0.0)	21 (3.0)	1 (0.1)	72 (10.2)	11 (1.6)	8 (1.1)	2 (0.3)	20 (2.8)	1 (0.1)	12 (1.7)	3 (0.4)	3 (0.4)	3 (0.4)	

### c. 塾の友人（仲良し）の属性

表14には塾での仲良し関係について示した。ここでは同学校・同学年・異クラス・同性の友人が選ばれる割合が第1位であった。ついで同学校・同学年・同クラス・同性の友人が選ばれた。塾の友人も、同じ学校の同学年・同性が最も多く選ばれている。

一方、異学年との交友は、同じ学校の者が11%弱、別の学校の者を合わせて12%程であった。このうち上級生は4%弱、下級生は8%強である。やや下級生が選ばれる事が多い。

学年別には全体的傾向との間で大きな差はないが、5年生は6年生に比べて同学校・同学年・異クラス・同性を選ぶ者の割合がやや小さく、逆に同学校・同学年・同クラス・同性を選ぶ割合がやや大きい傾向がみられた。又、別の学校の友人を選ぶ割合は、全体に小さいながら6年生の方が5年生よりも相対的には大きい傾向を示した。5年生に比べて6年生で、やや交友の属性にひろがりがある事が、以上の諸点からうかがえるであろう。性差は顕著なものはみられなかった。異性の選択は少数であった。別の学校から選んだ友人も3.7%と多いものではなかった。

### d. 塾の友人（教え合い）の属性

教え合いという活動に関連した友人については表15にその属性を示した。そこでは同学校・同学年・異クラス・同性の割合が最も大きく、ついで同学校・同学年・同クラス・同性であった。ここでも同学校の同学年・同性が最も多く選ばれている。

一方、異学年との交友は同じ学校内で11.2%、別の学校も含めて12.1%である。このうち上級生は4%弱、下級生は8%強であった。下級生の方がやや多く選ばれている。

学年別には5年生で、同学校・同学年・異クラス・同性を選ぶ割合が、6年生に比べてやや小さい傾向がみられた。しかし総じて学年差は著しいものではなかった。又、性差については、顕著なものは見出されなかった。異性の選択は少数であった。又、別の学校から選んだ友人は4.6%と多くはなかった。

表14 被選択者の内訳一塾の交友関係 (仲良し) ( )内%

	同じ						別の					
	同学年			異学年			同学年			異学年		
	同クラス 同性	異クラス 同性	異クラス 異性	上級 同性	異級 同性	下級 同性	上級 同性	異級 同性	下級 同性	上級 異性	異級 異性	下級 異性
5年生	男	83 (33.9)	0 (0.0)	121 (49.4)	0 (0.0)	18 (7.3)	0 (0.0)	19 (7.8)	0 (0.0)	3 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	121 (44.3)	0 (0.0)	118 (43.2)	0 (0.0)	7 (2.6)	1 (0.4)	15 (5.5)	1 (0.4)	4 (1.5)	0 (0.0)	6 (2.2)
	計	204 (39.4)	0 (0.0)	239 (46.1)	0 (0.0)	25 (4.8)	1 (0.2)	34 (6.6)	1 (0.2)	7 (1.4)	0 (0.0)	7 (1.4)
6年生	男	53 (35.6)	0 (0.0)	75 (50.3)	1 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (8.1)	0 (0.0)	8 (5.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	24 (23.8)	0 (0.0)	60 (59.4)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (9.9)	0 (0.0)	4 (4.0)	2 (2.0)	0 (0.0)
	計	77 (30.8)	0 (0.0)	135 (54.0)	2 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	22 (8.8)	0 (0.0)	12 (4.8)	2 (0.8)	0 (0.0)
合計	男	136 (34.5)	0 (0.0)	196 (49.7)	1 (0.3)	18 (4.6)	0 (0.0)	31 (7.9)	0 (0.0)	11 (2.8)	0 (0.0)	1 (0.3)
	女	145 (38.8)	0 (0.0)	178 (47.6)	1 (0.3)	7 (1.9)	1 (0.3)	25 (6.7)	1 (0.3)	8 (2.1)	2 (0.5)	6 (1.6)
	総計	281 (36.6)	0 (0.0)	374 (48.7)	2 (0.3)	25 (3.3)	1 (0.1)	56 (7.3)	1 (0.1)	19 (2.5)	2 (0.3)	7 (0.9)

表15 被選択者の内訳一塾の交友関係(教え合い) ( )内%

	同じ学校										別の学校					
	同学年					異学年					同学年			異学年		
	同クラス 同性	同クラス 異性	異クラス 同性	異クラス 異性	同級 同性	同級 異性	上級 同性	上級 異性	下級 同性	下級 異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5年生	男	58 (34.5)	0 (0.0)	77 (45.8)	0 (0.0)	12 (7.1)	0 (0.0)	10 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (6.0)	0 (0.0)	1 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	91 (41.4)	1 (0.5)	94 (42.7)	4 (1.8)	10 (4.5)	0 (0.0)	9 (4.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (3.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.8)	0 (0.0)
	計	149 (38.4)	1 (0.3)	171 (44.1)	4 (1.0)	22 (5.7)	0 (0.0)	19 (4.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (4.4)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	4 (1.0)	0 (0.0)
6年生	男	41 (33.1)	0 (0.0)	68 (54.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (11.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	22 (27.8)	2 (2.5)	40 (50.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (8.9)	4 (5.1)	4 (5.1)	4 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	63 (31.0)	2 (1.0)	108 (53.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	21 (10.3)	4 (2.0)	4 (2.0)	5 (2.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	男	99 (33.9)	0 (0.0)	145 (49.7)	0 (0.0)	12 (4.1)	0 (0.0)	24 (8.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (3.8)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	113 (37.8)	3 (1.0)	134 (44.8)	4 (1.3)	10 (3.3)	0 (0.0)	16 (5.4)	4 (1.3)	4 (1.3)	11 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.3)	0 (0.0)
	総計	212 (35.9)	3 (0.5)	279 (47.2)	4 (0.7)	22 (3.7)	0 (0.0)	40 (6.8)	4 (0.7)	4 (0.7)	22 (3.7)	0 (0.0)	1 (0.2)	0 (0.0)	4 (0.7)	0 (0.0)

e. 各基準間の被選択者の属性の相違

仲良し関係についての3場面、学校内、学校外、塾での交友関係の比較をまず行なう。すべての基準で同学校・同学年・同性の友人が被選択者の大多数を占めたことは共通する結果であった。しかしそれが同学校の同クラスの者か異クラスの者か、その相対的な割合についてみると、学校内、学校外、塾の順に同クラスの者の割合が減少してくる。塾に至ってはその順位が同クラスから異クラスへと逆転するのである。

又、異年齢交友については、学校内では他の2基準に比べて少ない。又、塾に比べて、やや学校外基準の方が多様で、量も多い傾向がみられた。別の学校の友人の数は、学校外、塾の2基準で大きな差はみられなかった。

学年間の差異としては、各基準共通して、5年生に比べて6年生で交友関係にひろがりを見ることができた。同クラスから異クラスへのひろがり最も目につく所である。性差は総じて大きいものではなかった。また異性との交友も各基準で少ない結果であった。

塾事態での2基準（仲良し、教え合い）については、顕著な違いは認められなかった。

(4) 選択の内訳——選択者の分類からの分析

次に、(3)と同様の内容を別の視点から分析し直してみる。各被調査者がどのような属性の友人を選んだかを選択者の人数でまとめて示したのが表16から表19である。被調査者は幾通りかの属性をもつ友人を選んでいる場合が多い。各属性のパターンのいずれかに属する友人を1人でも選んでいれば1としてカウントする。したがって表中の数字は被調査者数をうわまわる事になる。割合の分母は被調査者数である。

a. 学校内の友人の内訳

表16では学校内の友人の内訳を示した。これによれば、ほぼ100%に近い児童が、同学年・同クラス・同性の友人に少なくとも1人は記入している事が示される。同学年・異クラス・同性の友人はそれぞれにつき、70%程度の者が選んでいる。

学年間では、同学年・異クラス・同性を選ぶ人数が5年生より6年生で

表16 選択の内訳——学校内交友関係 ( )内%

		同 学 年				異 学 年			
		同クラス		異クラス		上 級		下 級	
		同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5年生	男	56 (98.2)	0 (0.0)	32 (56.1)	0 (0.0)	3 (5.3)	0 (0.0)	6 (10.5)	0 (0.0)
	女	61 (96.8)	1 (1.6)	43 (68.3)	1 (1.6)	2 (3.2)	0 (0.0)	9 (14.3)	0 (0.0)
	計	117 (97.5)	1 (0.8)	75 (62.5)	1 (0.8)	5 (4.2)	0 (0.0)	15 (12.5)	0 (0.0)
6年生	男	31 (96.9)	1 (3.1)	29 (90.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (15.6)	0 (0.0)
	女	23 (100.0)	2 (8.7)	17 (73.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (17.4)	0 (0.0)
	計	54 (98.2)	3 (5.5)	46 (83.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (16.4)	0 (0.0)
合 計	男	87 (97.8)	1 (1.1)	61 (68.5)	0 (0.0)	3 (3.4)	0 (0.0)	11 (12.4)	0 (0.0)
	女	84 (97.7)	3 (3.5)	60 (69.8)	1 (1.2)	2 (2.3)	0 (0.0)	13 (15.1)	0 (0.0)
	総計	171 (97.7)	4 (2.3)	121 (69.1)	1 (0.6)	5 (2.9)	0 (0.0)	24 (13.7)	0 (0.0)

多い傾向がみられた。性差は全体には小さいが、学年別にみると、同学年・異クラス・同性の友人選択で、5年生で女子、6年生で男子が多い傾向がみられた。異性との交友は、それをあげる者が少なかった。異学年との交友は同性に限られた。中では下級生が多く、13.7%が少なくとも1人はそれを選んだのである。

#### b. 学校外の友人の内訳

表17には学校外の友人の内訳を示した。ここでは76%の児童が同学校・同学年・同クラス・同性の友人を選んでいる。又、同学校・同学年・異クラス・同性の友人も64.6%と比較的高い割合で選ばれている。さらに、同学校・下級・同性の友人は30%ほどの者が選んでいる。又、上級生・同性についても10%弱の者が友人として選んでいる。

学年間では、同学年・異クラス・同性の友人を選ぶ割合が6年生で高く

表17 選択の内訳—学校外交友関係 ( )内%

	同じ学校						別の学校						
	同学年			異学年			同学年			異学年			
	同クラス		異クラス	上級		下級	同級		異級	上級		下級	
	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	
5年生	男	46 (80.7)	0 (0.0)	34 (59.6)	0 (0.0)	9 (15.8)	0 (0.0)	20 (35.1)	2 (3.5)	3 (5.3)	0 (0.0)	3 (5.3)	0 (0.0)
	女	44 (69.8)	0 (0.0)	35 (55.6)	0 (0.0)	8 (12.7)	1 (1.6)	19 (30.2)	6 (9.5)	2 (3.2)	1 (1.6)	7 (11.1)	1 (1.6)
	計	90 (75.0)	0 (0.0)	69 (57.5)	0 (0.0)	17 (14.2)	1 (0.8)	39 (32.5)	8 (6.7)	5 (4.2)	1 (0.8)	10 (8.3)	1 (0.8)
6年生	男	26 (81.3)	0 (0.0)	25 (78.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (18.8)	1 (3.1)	1 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	17 (73.9)	0 (0.0)	19 (82.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (30.4)	1 (4.3)	0 (0.0)	2 (8.7)	1 (4.3)	1 (4.3)
	計	43 (78.2)	0 (0.0)	44 (80.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (23.6)	2 (3.6)	1 (1.8)	2 (7.3)	1 (1.8)	1 (1.8)
合計	男	72 (80.9)	0 (0.0)	59 (66.3)	0 (0.0)	9 (10.1)	0 (0.0)	26 (29.2)	3 (3.4)	4 (4.5)	0 (0.0)	3 (3.4)	0 (0.0)
	女	61 (70.9)	0 (0.0)	54 (62.8)	0 (0.0)	8 (9.3)	1 (1.2)	26 (30.2)	7 (8.1)	2 (2.3)	1 (1.2)	8 (9.3)	2 (2.3)
	総計	133 (76.0)	0 (0.0)	113 (64.6)	0 (0.0)	17 (9.7)	1 (0.6)	52 (29.7)	10 (5.7)	6 (3.4)	1 (0.6)	11 (6.3)	2 (1.1)

なる傾向が顕著なものであった。又、同じ学校の異学年との交友では5年生がやや多い傾向がみられた。性差は、同学校・同学年・同クラス・同性の選択で女子がやや少い一方、別の学校の友人選択では女子がやや多い傾向もみたのである。異性との交友をあげる者は少数であった。別の学校の友人との交友は上級、同性で9%、下級、同性で6%ほどと、多いものではないが一定数は見ることができた。

c. 塾の友人（仲良し）の内訳

塾の仲良し関係では、同学校・同学年・異クラス・同性の者を1人以上選んだ者が92%と最も多い結果である事が表18で示された。又、同学校・同学年・同クラス・同性の者は82.3%と、これも高い割合で選ばれた。同学校・下級・同性は22%弱が選んでいる。又、上級生・同性についても10%弱の者が選択をしている。

学年間では、同じ学校については差はほとんどなく、別の学校・同学年・同性について、やや6年生が多い傾向がみられた。性差も全体的には小さいものであった。ただ、5年生で、男子が女子に比べて同学校・同学年・同クラス・同性を選ぶ割合がやや低く、異学年の交友がやや多い傾向がみられ、一方、6年生では女子の方が、下級生の同性を選ぶ者の割合がやや高い結果であった。全般に異性との交友をあげる者は少数であった。又、別の学校との交友は同学年・同性で9%程度であり、これも全般に少ないものであった。

d. 塾の友人（教え合い）の内訳

塾での教え合い関係の友人については表19に結果を示す。ここでも表18と同様、同学校・同学年・異クラス・同性が最も多く、80.6%であった。ついで同学校・同学年・同クラス・同性が70%程度であった。同学校の上級生は8%、下級生は17%が同性から選ばれた。

学年間では、6年生で同学校・下級生・同性を選ぶ割合が5年生に比べてやや高いほかはとくに差はみられなかった。性差も全体的には大きいものではない。ただ学年間では、5年生で女子が、6年生で男子が同学校・同学年の同性を多く選ぶ傾向がみられる。異性をあげる者は少数であった。



表18 選択の内訳一塾の交友関係 (仲良し) ( )内%

	同じ						別の						
	同 学 年			異 学 年			同 学 年			異 学 年			
	同クラス	異クラス	異性	同性	異性	同性	上 級	下 級	異性	同性	異性	同性	
5 年 生	男	43 (75.4)	0 (0.0)	54 (94.7)	0 (0.0)	11 (19.3)	0 (0.0)	13 (22.8)	0 (0.0)	3 (5.3)	0 (0.0)	1 (1.8)	0 (0.0)
	女	58 (92.1)	0 (0.0)	56 (88.9)	0 (0.0)	6 (9.5)	1 (1.6)	12 (19.0)	1 (1.6)	4 (6.3)	0 (0.0)	4 (6.3)	0 (0.0)
	計	101 (84.2)	0 (0.0)	111 (92.5)	0 (0.0)	17 (14.2)	1 (0.8)	25 (20.8)	1 (0.8)	7 (5.8)	0 (0.0)	5 (4.2)	0 (0.0)
6 年 生	男	26 (81.3)	0 (0.0)	29 (90.6)	1 (3.1)	0 (0.0)	6 (18.8)	0 (0.0)	5 (15.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	17 (73.9)	0 (0.0)	22 (95.7)	1 (4.3)	0 (0.0)	7 (30.4)	0 (0.0)	4 (17.4)	0 (0.0)	1 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	43 (78.2)	0 (0.0)	51 (92.7)	2 (3.6)	0 (0.0)	13 (23.6)	0 (0.0)	9 (16.4)	0 (0.0)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	男	69 (77.5)	0 (0.0)	83 (93.3)	1 (1.1)	11 (12.4)	0 (0.0)	19 (21.3)	0 (0.0)	8 (9.0)	0 (0.0)	1 (1.1)	0 (0.0)
	女	75 (87.2)	0 (0.0)	78 (90.7)	1 (1.2)	6 (7.0)	1 (1.2)	19 (22.1)	1 (1.2)	8 (9.3)	0 (0.0)	4 (4.7)	0 (0.0)
	総計	144 (82.3)	0 (0.0)	161 (92.0)	2 (1.1)	17 (9.7)	1 (0.6)	38 (21.7)	1 (0.6)	16 (9.1)	0 (0.0)	5 (2.9)	0 (0.0)

表19 選択の内訳—塾の交友関係(教え合い) ( )内%

	同じ						別の							
	同クラス			同学年			同学年			同学年				
	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	同性	異性	
5年生	男	37 (64.9)	0 (0.0)	39 (68.4)	0 (0.0)	7 (12.3)	0 (0.0)	8 (14.0)	0 (0.0)	8 (14.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	48 (76.2)	1 (1.6)	55 (87.3)	3 (4.8)	7 (11.1)	0 (0.0)	7 (11.1)	0 (0.0)	4 (6.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.3)	0 (0.0)
	計	85 (70.8)	1 (0.8)	94 (78.3)	3 (2.5)	14 (11.7)	0 (0.0)	15 (12.5)	0 (0.0)	12 (10.0)	0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)	4 (3.3)
6年生	男	23 (71.9)	0 (0.0)	29 (90.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (28.1)	0 (0.0)	1 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	14 (60.9)	1 (4.3)	18 (78.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (26.1)	2 (8.7)	3 (13.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	37 (67.3)	1 (1.8)	47 (85.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (27.3)	2 (3.6)	4 (7.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	男	60 (67.4)	0 (0.0)	68 (76.4)	0 (0.0)	7 (7.9)	0 (0.0)	17 (19.1)	0 (0.0)	9 (10.1)	0 (0.0)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	62 (72.1)	2 (2.3)	73 (84.9)	3 (3.5)	7 (8.1)	0 (0.0)	13 (15.1)	2 (2.3)	7 (8.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.7)	0 (0.0)
	総計	122 (69.7)	2 (1.1)	141 (80.6)	3 (1.7)	14 (8.0)	0 (0.0)	30 (17.1)	2 (1.1)	16 (9.1)	0 (0.0)	1 (0.6)	0 (0.0)	4 (2.3)

又、別の学校の友人は同学年・同性が9%ほど選ばれたが、総じてその数は多いものではなかった。

e. 各選択基準間の相違

各基準を通して同学校・同学年・同性が最も多く選ばれる傾向がみられる。仲良し関係をたずねた3基準間ではとくに同クラスからの選択が、学校内交友関係の明らかな特徴となっている。しかし、塾ではむしろ異クラスの同学年・同性が選ばれる事が多くなる。又学校外では年齢異質な交友の割合が増す傾向をうかがう結果が示された。塾の場合は学校外よりは少ないが、一定数の年齢混合交友の存在が示されたといえよう。

塾に関する2基準間では、表14、表15にみられる教え合い基準での選択数の減少を反映してか、各属性の選択の割合は教え合いの方で低下する結果がみられた。

(5) 各選択基準間での被選択者の一致人数

表20から表25までは4つの基準間の選択の一致人数を、記入した氏名を

表20 学校内の友と学校外の友人の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	2 (3.5)	3 (5.3)	14 (24.6)	18 (31.6)	13 (22.8)	7 (12.3)
	女	0 (0.0)	6 (9.5)	11 (17.5)	21 (33.3)	19 (30.2)	6 (9.5)
	計	2 (1.7)	9 (7.5)	25 (20.8)	39 (32.5)	32 (26.7)	13 (10.8)
6 年生	男	4 (12.5)	5 (15.6)	7 (21.9)	8 (25.0)	7 (21.9)	1 (3.1)
	女	1 (4.3)	1 (4.3)	6 (26.1)	9 (39.1)	5 (21.7)	1 (4.3)
	計	5 (9.1)	6 (10.9)	13 (23.6)	17 (30.9)	12 (21.8)	2 (3.6)
合 計	男	6 (6.7)	8 (9.0)	21 (23.6)	26 (29.2)	20 (22.5)	8 (9.0)
	女	1 (1.2)	7 (8.1)	17 (19.8)	30 (34.9)	24 (27.9)	7 (8.1)
	総計	7 (4.0)	15 (8.6)	38 (21.7)	56 (32.0)	44 (25.1)	15 (8.6)

照合する事によって数えあげた結果を示した。これによって、各基準の被選択者の重複、相違の状態、ひいては交友関係のひろがりの検討のための示唆的資料が得られるだろう。

a. 学校内の友人と学校外の友人の一致

表20には学校内、学校外の2基準に記された友人の一致人数を示した。ここでは2人一致が最も多く、ついで1人一致、さらに3人一致がつづく。すなわち1～3人の間で80%近くを占める結果である。学校内、学校外の友人がすべて一致する又は全く一致しない者は多い数ではなかった。一致度の性差、学年差は多少みられたが大きいものではなかった。

b. 学校内の友人と塾の友人（仲良し）の一致

表21には学校内の友人と塾の友人（仲良し）の一致人数を示した。これも表20と同様2人一致が最も多い結果であった。しかも、1人、0人がそれにつづき、総じてこの2基準の間の友人の一致度は高いものではなかつ

表21 学校内の友人と塾の友人（仲良し）の一致人数 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	0 (0.0)	1 (1.8)	3 (5.3)	21 (36.8)	17 (29.8)	15 (26.3)
	女	0 (0.0)	4 (6.3)	16 (26.4)	15 (23.8)	18 (28.6)	10 (16.9)
	計	0 (0.0)	5 (4.2)	19 (15.8)	36 (30.0)	35 (29.2)	25 (20.8)
6年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.3)	19 (59.4)	6 (18.8)	5 (15.6)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (8.7)	8 (34.8)	9 (39.1)	4 (17.4)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (7.2)	27 (49.1)	15 (27.3)	9 (16.4)
合計	男	0 (0.0)	1 (1.1)	5 (5.6)	40 (44.9)	23 (25.8)	20 (22.5)
	女	0 (0.0)	4 (4.7)	18 (20.9)	23 (26.7)	27 (31.4)	14 (16.3)
	総計	0 (0.0)	5 (2.9)	23 (13.1)	63 (36.0)	50 (28.6)	34 (19.4)

た。5人一致は0人，4人一致も3%程と多人数の一致はむしろ例外的なものであった。

学年間では6年生の方が一致人数が多い。又性別では女子の方が一致が多い傾向がみられた。

c. 学校内の友人と塾の友人(教え合い)の一致

表22には学校内の友人と塾の友人(教え合い)の一致人数を示した。この結果では，先の表21に比べてさらに一致人数が減少している。ただし，この結果は，学校と塾という事態差だけでなく，仲良しと教え合いという側面での基準の違いもあることには留意すべきであろう。

学年間ではやや6年生の方が一致度が高い。性差は著しいものではないが，やや女子の方が一致人数が多いように思われる結果であった。

d. 学校外の友人と塾の友人(仲良し)の一致

学校外の友人と塾の仲良しとの一致は1人が最も多い結果であった。0

表22 学校内の友人と塾の友人(教え合い)の一致人数 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	0 (0.0)	2 (3.5)	3 (5.3)	4 (7.0)	23 (40.4)	25 (43.9)
	女	0 (0.0)	3 (4.8)	7 (11.1)	16 (25.4)	23 (36.5)	14 (22.2)
	計	0 (0.0)	5 (4.2)	10 (8.3)	20 (16.7)	46 (38.3)	39 (32.5)
6年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.3)	15 (46.9)	10 (31.3)	5 (15.6)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.3)	8 (34.8)	8 (34.8)	6 (26.1)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (5.5)	23 (41.8)	18 (32.7)	11 (20.0)
合計	男	0 (0.0)	2 (2.2)	5 (5.6)	19 (21.3)	33 (37.1)	30 (33.7)
	女	0 (0.0)	3 (3.5)	8 (9.3)	24 (27.9)	31 (36.0)	20 (23.3)
	総計	0 (0.0)	5 (2.9)	13 (7.4)	43 (24.6)	64 (36.6)	50 (28.6)

表23 学校外の友人と塾の友人（仲良し）の一致人数（ ）内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	3 (5.3)	5 (8.8)	17 (29.8)	19 (33.3)	13 (22.8)
	女	0 (0.0)	1 (1.6)	8 (12.7)	11 (17.5)	26 (41.3)	17 (27.0)
	計	0 (0.0)	4 (3.3)	13 (10.8)	28 (23.3)	45 (37.5)	30 (25.0)
6 年生	男	0 (0.0)	1 (3.1)	3 (9.4)	8 (25.0)	9 (28.1)	11 (34.4)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (13.0)	3 (13.0)	11 (47.8)	6 (26.1)
	計	0 (0.0)	1 (1.8)	6 (10.9)	11 (20.0)	20 (36.4)	17 (30.9)
合 計	男	0 (0.0)	4 (4.5)	8 (9.0)	25 (28.1)	28 (31.5)	24 (27.0)
	女	0 (0.0)	1 (1.2)	11 (12.8)	14 (16.3)	37 (43.0)	23 (26.7)
	総計	0 (0.0)	5 (2.9)	19 (10.9)	39 (22.3)	65 (37.1)	47 (26.9)

人がそれにつき、3番目は2人の順であった。学校内の友人と塾の友人の一致度よりもややそれが低い結果であった。

学年間では大きな差はみられなかった。性差は女子が1人一致の者が多く、一致人数が男子に比べてやや少ない傾向であった。

#### e. 学校外の友人と塾の友人（教え合い）の一致

学校外の友人と塾での教え合い仲間の一致人数は表24に示す。ここでは0人が38%強と最も多く、ついで1人の35%であった。すなわち、この両基準の一致度は非常に低いと判断されるのである。学年間ではやや5年生の一致度が低い。又一方、性差は明らかではなかった。

#### f. 塾の友人での仲良しと教え合いの一致

表25は塾についての2基準間の一致人数を示したものである。最も多いのは2人の30%、ついで3人の22%である。4人、1人は17~18%程度であった。これまでの諸基準間の一致人数に比べてその一致度はやや高い。し

表24 学校外の友人と塾の友人 (教え合い) の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	1 (1.8)	5 (8.8)	5 (8.8)	19 (33.3)	27 (47.3)
	女	0 (0.0)	2 (3.2)	7 (11.1)	10 (16.9)	21 (33.3)	23 (36.5)
	計	0 (0.0)	3 (2.5)	12 (10.0)	15 (12.5)	40 (33.3)	50 (41.7)
6 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.1)	10 (31.3)	12 (37.5)	9 (28.1)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.3)	5 (21.7)	9 (39.1)	8 (34.8)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.6)	15 (27.3)	21 (38.2)	17 (30.9)
合 計	男	0 (0.0)	1 (1.1)	6 (6.7)	15 (16.9)	31 (34.8)	36 (40.4)
	女	0 (0.0)	2 (2.3)	8 (9.3)	15 (17.4)	30 (34.9)	31 (36.0)
	総計	0 (0.0)	3 (1.7)	14 (8.0)	30 (17.1)	61 (34.9)	67 (38.3)

かし同じ塾内という事態での友人関係でありながら、かなりの分化を示している事も示されたのである。

学年間では6年生が一致人数がやや多い傾向がある。性差は、6年生男子に非常に一致度の高い回答もみられるが、概して大きいものではなかった。

#### g. 各基準間の一致を通しての検討

仲良しという基準で質問した学校内、学校外、塾の3基準内の一致度は、学校内と学校外の間が最も高く、ついで学校内と塾、さらに学校外と塾という順になっていた。塾の交友関係は学校内、学校外の友人と少数重複するが、それは学校内と学校外との間ほどには一致をしていない。双方とは一定程度独立した交友関係の成立している事がうかがえたのである。なお、学校内、学校外にしてもその一致はさほど大きいものではなかった。塾の交友は、学校外よりはやや学校内の方との関係性が、微妙ではあるが強い

表25 塾の友人（仲良し）と塾の友人（教え合い）の一致人数（ ）内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	1 (1.8)	6 (10.5)	11 (19.3)	18 (31.6)	10 (17.5)	11 (19.3)
	女	2 (3.2)	10 (16.9)	14 (22.2)	22 (34.9)	13 (20.6)	2 (3.2)
	計	3 (2.5)	16 (13.3)	25 (20.8)	40 (33.3)	23 (19.2)	13 (10.8)
6 年生	男	6 (18.8)	7 (21.9)	7 (21.9)	6 (18.8)	5 (15.6)	1 (3.1)
	女	0 (0.0)	6 (26.1)	6 (26.1)	7 (30.4)	3 (13.0)	1 (4.3)
	計	6 (10.9)	13 (23.6)	13 (23.6)	13 (23.6)	8 (14.5)	2 (3.6)
合 計	男	7 (7.9)	13 (14.6)	18 (20.2)	24 (27.0)	15 (16.9)	12 (13.5)
	女	2 (2.3)	16 (18.6)	20 (23.4)	29 (33.7)	16 (18.6)	3 (3.5)
	総計	9 (5.1)	29 (16.6)	38 (21.7)	53 (30.3)	31 (17.7)	15 (8.6)

ように思えたのは興味ある結果であった。

塾の友人の仲良しと教え合いの一致度は、他の組合せに比べて高いものであった。しかしその一致も全員という所からは遠く、基準によって友人を区別していることがうかがえる結果であった。

#### (6) 選択理由の内訳

表26から表29には、各選択基準での友人選択の理由を示した。選択理由は方法の項で言及した4カテゴリーと「その他」からなる。表中の数値は当該理由による被選択者数である。

##### a. 学校内の友人の選択理由

表26には学校内の友人の選択理由を示した。全体的に最も多い理由は「同情・愛着」の38.3%である。ついで「尊敬・共鳴」,「相互的接近」がそれぞれ20%台の割合を示した。「集团的協同」は5.1%にとどまった。



表26 選択理由内訳——学校内の友人 ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 協同	その他
5年生	男	68 (25.1)	100 (36.9)	80 (29.5)	14 (5.2)	9 (3.3)
	女	67 (23.2)	119 (41.2)	81 (28.0)	16 (5.5)	6 (2.1)
	計	135 (24.1)	219 (39.1)	161 (28.8)	30 (5.4)	15 (2.7)
6年生	男	38 (24.1)	65 (41.1)	40 (25.3)	10 (6.3)	5 (3.2)
	女	32 (30.5)	31 (29.5)	31 (29.5)	2 (1.9)	9 (8.6)
	計	70 (26.6)	96 (36.5)	71 (27.0)	12 (4.6)	14 (5.3)
合計	男	106 (24.7)	165 (38.5)	120 (28.0)	24 (5.6)	14 (3.3)
	女	99 (25.1)	150 (38.1)	112 (28.4)	18 (4.6)	15 (3.8)
	総計	205 (24.9)	315 (38.3)	232 (28.2)	42 (5.1)	29 (3.5)

学年間では大きな差は認められなかった。性差は、全体的には非常に小さかったが、6年生の「同情・愛着」では男子が女子に比べて高い割合を示した。

#### b. 学校外の友人の選択理由

表27には学校外の友人の選択理由を示した。全体的には最も多い理由は「同情・愛着」の34%であったが、「相互的接近」の要因も30%をこえた。この2つの理由について「尊敬・共鳴」が23.3%を占めた。「集団的協同」は4.9%にとどまった。

学年間では大きな差は認められなかった。性差は男子に比べて女子で「相互的接近」の理由が多くみられるという傾向で示された。この差は5年生、6年生でともに同様に示された。

表27 選択理由内訳——学校外の友人 ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 協同	その他
5年生	男	63 (26.8)	82 (34.9)	60 (25.5)	11 (4.7)	19 (8.1)
	女	81 (39.3)	66 (32.0)	41 (19.9)	8 (3.9)	10 (4.9)
	計	144 (32.7)	148 (33.6)	101 (22.9)	19 (4.3)	29 (6.6)
6年生	男	33 (24.4)	54 (40.0)	32 (23.7)	10 (7.4)	6 (4.4)
	女	37 (36.6)	28 (27.7)	25 (24.8)	4 (4.0)	7 (6.9)
	計	70 (29.7)	82 (34.7)	57 (24.2)	14 (5.9)	13 (5.5)
合計	男	96 (25.9)	136 (36.8)	92 (24.9)	21 (5.7)	25 (6.8)
	女	118 (38.4)	94 (30.6)	66 (21.5)	12 (3.9)	17 (5.5)
	総計	214 (31.6)	230 (34.0)	158 (23.3)	33 (4.9)	42 (6.2)

## c. 塾の友人（仲良し）の選択理由

表28には塾の仲良しの友人の選択理由を示した。これによれば、全体では「同情・愛着」への回答が40%をこえて最も大きい割合を示している。ついで「尊敬・共鳴」の26%、さらに「相互的接近」の18%となり、「集団的協同」は5.1%にとどまった。

学年間では6年生で5年生に比べて「同情・愛着」の割合がやや大きく、5年生は6年生に比べて「尊敬・共鳴」の割合がやや大きい点を除いては大きな差は認められない。性差は総じて大きいものではないが、6年生に限って、女子が男子に比べて「同情・愛着」の割合がやや大きい傾向が認められた。

表28 選択理由内訳——塾の友人 (仲良し) ( )内%

		相互的 接 近	同 情・ 愛 着	尊 敬・ 共 鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
5 年 生	男	39 (15.7)	96 (38.7)	78 (31.5)	18 (7.3)	17 (6.9)
	女	54 (20.0)	115 (42.6)	69 (25.6)	12 (4.4)	20 (7.4)
	計	93 (18.0)	211 (40.7)	147 (28.4)	30 (5.8)	37 (7.1)
6 年 生	男	32 (21.3)	67 (44.7)	35 (23.3)	6 (4.0)	10 (6.7)
	女	14 (13.7)	56 (54.9)	19 (18.6)	3 (2.9)	10 (9.8)
	計	46 (18.3)	123 (48.8)	54 (21.4)	9 (3.6)	20 (7.9)
合 計	男	71 (17.8)	163 (41.0)	113 (28.4)	24 (6.0)	27 (6.8)
	女	68 (18.3)	171 (46.0)	88 (23.7)	15 (4.0)	30 (8.1)
	総計	139 (18.1)	334 (43.3)	201 (26.1)	39 (5.1)	57 (7.4)

## d. 塾の友人 (教え合い) の選択理由

表29には塾での教え合いによる友人の選択理由を示した。全体に「同情・愛着」の割合が40%をこえて大きい。「尊敬・共鳴」は26%とそれにつき、「相互的接近」は17.5%であった。「集団的協力」は6.4%であった。

学年間では大きな差は認められない。性差は学年差と同様、小さいものであった。

## e. 各基準における選択理由の比較

全体的には、各基準通して「同情・愛着」が最も多く選ばれている。学校の友人では「尊敬・共鳴」がそれにつき、「相互的接近」が第3位という結果は、「集団的協力」がやや少ないながら、田中(1975)と類似の結果を示したのである。一方、その他の基準については、学校内の友人との比較で、それぞれやや特徴ある結果を示している。

表29 選択理由内訳——塾の友人(教え合い) ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	20 (12.3)	78 (47.9)	46 (28.2)	10 (6.1)	9 (5.5)
	女	41 (19.1)	89 (41.4)	50 (23.3)	15 (7.0)	20 (9.3)
	計	61 (16.1)	167 (44.2)	96 (25.4)	25 (6.6)	29 (7.7)
6年生	男	27 (22.3)	48 (39.7)	33 (27.3)	10 (8.3)	3 (2.5)
	女	13 (16.5)	36 (45.6)	21 (26.6)	2 (2.5)	7 (8.9)
	計	40 (20.0)	84 (42.0)	54 (27.0)	12 (6.0)	10 (5.0)
合計	男	47 (16.5)	126 (44.4)	79 (27.8)	20 (7.0)	12 (4.2)
	女	54 (18.4)	125 (42.5)	71 (24.1)	17 (5.8)	27 (9.2)
総計		101 (17.5)	251 (43.4)	150 (26.0)	37 (6.4)	39 (6.7)

学校外の友人では「相互的接近」の割合が大きい。又塾の友人の2基準では、「同情・愛着」の割合が大きくなっている。とくに塾では「相互的接近」の割合がやや低く、学校外の友人とは違った交友の契機がそこに生じている事をうかがわせる結果であった。

学年差・性差は各基準で多少の違いはあったが総じて大きいものではなかった。

#### (7) 被選択者属性別選択理由

表30から表36は各被選択者の属性別に選択理由をまとめたものである。4基準を通して集計し、属性別の全体的傾向を検討する資料とする。なお、表中の数値は同性の被選択者数である。被選択者の少ない異性については表に示さず、結果の記述に際して適宜文中に記述する。

##### a. 同学校・同学年・同クラスの友人の選択理由

表30 被選択者属性別選択理由——同じ学校・同学年・同クラス ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	118 (26.0)	163 (35.9)	129 (28.4)	22 (4.8)	22 (4.8)
	女	134 (26.7)	211 (42.1)	116 (23.2)	28 (5.6)	12 (2.4)
	計	252 (26.4)	374 (39.2)	245 (25.7)	50 (5.2)	34 (3.6)
6年生	男	82 (31.4)	86 (33.0)	62 (23.8)	25 (9.6)	6 (2.3)
	女	49 (31.0)	55 (34.8)	48 (30.4)	6 (3.8)	0 (0.0)
	計	131 (31.3)	141 (33.7)	110 (26.3)	31 (7.4)	6 (1.4)
合計	男	200 (28.0)	249 (34.8)	191 (26.7)	47 (6.6)	28 (3.9)
	女	183 (27.8)	266 (40.4)	164 (24.9)	34 (5.2)	12 (1.8)
	総計	383 (27.9)	515 (37.5)	355 (25.8)	81 (5.9)	40 (2.9)

表30には同学校・同学年・同クラスの友人の選択理由をまとめた。総じて「同情・愛着」が大きい割合を示し、「相互的接近」「尊敬・共鳴」がそれについている。「集团的協同」は5.9%と多いものではなかった。学年間ではとくに大きな差は認められなかった。又性差も大きいものではなかった。

異性は「相互的接近」に6ケース、「同情・愛着」に2ケースが認められた。

#### b. 同学校・同学年・異クラスの友人の選択理由

表31では、同学校・同学年・異クラスの友人の選択理由をまとめた。全体に「同情・愛着」が多く、45%近い割合を占めた。「尊敬・共鳴」がそれにつき、3番目の「相互的接近」は15%にとどまった。「集团的協同」は多いものではなかった。学年間の差は大きいものではない。又、性差も同

表31 被選択者属性別選択理由——同じ学校・同学年・異クラス ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 協同	その他
5年生	男	37 (12.0)	138 (44.8)	95 (30.8)	20 (6.5)	18 (5.8)
	女	48 (14.7)	134 (41.0)	103 (31.5)	16 (4.9)	26 (8.0)
	計	85 (13.4)	272 (42.8)	198 (31.2)	36 (5.7)	44 (6.9)
6年生	男	49 (19.1)	123 (48.0)	65 (25.4)	11 (4.3)	8 (3.1)
	女	25 (14.6)	80 (46.8)	42 (24.6)	2 (1.2)	22 (12.9)
	計	74 (17.3)	203 (47.5)	107 (25.1)	13 (3.0)	30 (7.0)
合計	男	86 (15.2)	261 (46.3)	160 (28.4)	31 (5.5)	26 (4.6)
	女	73 (14.7)	214 (43.0)	145 (29.1)	18 (3.6)	48 (9.6)
	総計	159 (15.0)	475 (44.7)	305 (28.7)	49 (4.6)	74 (7.0)

様に大きいものではなかった。

異性は「同情・愛着」に3ケース、「その他」に2ケースみられた。

### c. 同学校・上級生の友人の選択理由

表32には同学校・上級生の友人の選択理由をまとめた。6年生は同じ学校に上級生がおらず、すべてのセルが0のため除いた。5年生に限った結果であるが、ここでは「同情・愛着」が50%をこえ、最も多い理由となった。「相互的接近」、「尊敬・共鳴」は10%台になっている。又「集団的

表32 被選択者属性別選択理由——同じ学校・異学年(上級) ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 協同	その他
5年生	男	8 (16.0)	26 (52.0)	7 (14.0)	7 (14.0)	2 (4.0)
	女	6 (18.8)	16 (50.0)	3 (9.4)	2 (6.3)	5 (15.6)
	計	14 (17.1)	42 (51.2)	10 (12.2)	9 (11.0)	7 (8.5)

表33 被選択者属性別選択理由——同じ学校・異学年(下級) ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	18 (27.3)	17 (25.8)	22 (33.3)	0 (0.0)	9 (13.6)
	女	30 (47.6)	18 (28.6)	7 (11.1)	2 (3.2)	6 (9.5)
	計	48 (37.2)	35 (27.1)	29 (22.5)	2 (1.6)	15 (11.6)
6年生	男	6 (14.6)	18 (43.9)	8 (19.5)	0 (0.0)	9 (22.0)
	女	12 (33.3)	15 (41.7)	2 (5.6)	3 (8.3)	4 (11.1)
	計	18 (23.4)	33 (42.9)	10 (13.0)	3 (3.9)	13 (16.9)
合計	男	24 (22.4)	35 (32.7)	30 (28.0)	0 (0.0)	18 (16.8)
	女	42 (42.4)	33 (33.3)	9 (9.1)	5 (5.1)	10 (10.1)
	総計	66 (32.0)	68 (33.0)	39 (18.9)	5 (2.4)	28 (13.6)

協同」が11%と、これまでの諸結果の中では比較的高い割合を示すのが特徴であった。性差としてはとくに大きい点は認められなかった。

異性は「相互的接近」に1ケースみられたただけであった。

#### d. 同学校・下級生の友人の選択理由

表33には同学校・下級生の友人の選択理由をまとめた。全体的には「同情・愛着」,「相互的接近」がともに30%台で多く,「尊敬・共鳴」が19%とそれについだ。「集团的協同」は2.4%と非常に少ないものであった。学年間では6年生に比べて5年生に「相互的接近」が多く,「同情・愛着」が少なく,「尊敬・共鳴」が多い傾向がみられた。性差では女子が男子に比べて「相互的接近」が多く,「尊敬・共鳴」が少ない傾向が認められた。

異性は,「相互的接近」,「同情・愛着」に各2ケースずつみられた。又,「その他」に6ケースみられた。

表34 被選択者属性別選択理由——別の学校・同学年 ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 協同	その他
5年生	男	1 (6.7)	3 (20.0)	7 (46.7)	3 (20.0)	1 (6.7)
	女	1 (7.7)	7 (53.8)	2 (15.4)	3 (23.1)	0 (0.0)
	計	2 (7.1)	10 (35.7)	9 (32.1)	6 (21.4)	1 (3.6)
6年生	男	0 (0.0)	4 (33.3)	6 (50.0)	0 (0.0)	2 (16.7)
	女	0 (0.0)	4 (50.0)	4 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	0 (0.0)	8 (40.0)	10 (50.0)	0 (0.0)	2 (10.0)
合計	男	1 (3.7)	7 (25.9)	13 (48.1)	3 (11.1)	3 (11.1)
	女	1 (4.8)	11 (52.4)	6 (28.6)	3 (14.3)	0 (0.0)
	総計	2 (4.2)	18 (37.5)	19 (39.6)	6 (12.5)	3 (6.3)

## e. 別の学校・同学年の友人の選択理由

表34には別の学校・同学年の友人の選択理由をまとめた。ここでは「尊敬・共鳴」が40%弱で最大の理由となっており、又やや少ないがほぼ同じ割合の者が「同情・愛着」を理由としている。「相互的接近」は非常に少なく、むしろ「集団的協同」の12.5%が3番目の理由となっている。学年差、性差は、被選択者数が少なくなるためとくに検討は加えない。

異性は、「相互的接近」に2ケースみられたにとどまった。

## f. 別の学校・上級生の友人の選択理由

表35は、別の学校の上級生の友人を選択した理由を示したものである。ここでは「同情・愛着」、「相互的接近」の2カテゴリーに理由が集まった。学年差、性差は被選択者数が少なく、表に示すにとどめる。

なお、異性については「相互的接近」で1ケース認められた。



表35 被選択者属性別選択理由——別の学校・異学年(上級) ( )内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集団的 同協	その他
5年生	男	0 (0.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)
	女	2 (25.0)	4 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)
	計	2 (18.2)	6 (54.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (27.2)
6年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	女	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)
	計	0 (0.0)	2 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (66.7)
合計	男	0 (0.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (60.0)
	女	6 (37.5)	6 (37.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (25.0)
	総計	6 (28.6)	8 (38.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (33.3)

## g. 別の学校・下級生の友人の選択理由

表36には別の学校・下級生の友人の選択理由をまとめた。ここでも「相互的接近」が最も多く、あと「同情・愛着」,「尊敬・共鳴」にも回答がみられた。学年差, 性差はケース数が少ないため表に示すにとどめる。

異性の友人は「相互的接近」に3ケースみられた。

## h. 被選択者の属性による選択理由の相違

表30から表36までの結果の検討から, 被選択者の属性によって選択理由の傾向に多少の差が認められた。

同学校・同学年でクラスが一緒か否かという属性間では, 同クラスの方が異クラスに比べて「相互的接近」が多く「同情・愛着」の割合が多少小さい傾向があるように思われる。異クラスの友人の場合, 「相互的接近」といった選択理由としてはプリミティブなものがやや少ないのである。ただ

表36 被選択者属性別選択理由——別の学校・異学年（下級）（ ）内%

		相互的 接近	同情・ 愛着	尊敬・ 共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	10 (50.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	0 (0.0)	3 (15.0)
	計	11 (45.8)	6 (25.0)	4 (16.7)	0 (0.0)	3 (12.5)
6年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	男	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	11 (52.4)	4 (19.0)	3 (14.3)	0 (0.0)	3 (14.3)
	総計	12 (48.0)	6 (24.0)	4 (16.0)	0 (0.0)	3 (12.0)

し「同情・愛着」はクラスの異同にかかわらず、常に最も多くを占める理由であった。

同学校・異学年の上級生と下級生の間では、前者に「同情・愛着」が非常に多く、後者に「相互的接近」が多い傾向がみられる。又、上級生の場合「集团的協同」が他の属性の被選択者に比べて高い割合で示される結果がみられたのである。

同学年と異学年の間では、比較のポイントが複雑になり、端的にはその差は指摘できない。しかし、「同情・愛着」については下級生、同級生、上級生の順にその割合が増大する傾向が認められた、「集团的協同」でも類似の傾向が指摘できよう。

別の同学校・同学年の友人は「尊敬・共鳴」、「集团的協同」といった選択理由が他の条件と比べてやや多い傾向が特徴としてあった。これらの選

扱理由は、他の理由に比べて発達的に遅い時期にあらわれるものである (田中 1979)。

別の学校の上級生，下級生については，ケース数も多くなく，したがってとくに他の属性の被選択者の結果と比較する事はここでは行わない。

## 2. 学習塾について

### (1) 通塾方法，通塾時間

表37には，学習塾への通塾方法をまとめた。これによれば，徒歩の者は13%であるのに対して自転車が75%弱と圧倒的に多い。その他は12%程度

表37 通塾方法 ( )内%

	徒 歩	自転車	その他
5年生	7 (10.4)	50 (74.6)	10 (14.9)
6年生	9 (16.1)	42 (75.0)	5 (8.9)
合 計	16 (13.0)	92 (74.8)	15 (12.2)

表38 通塾時間 ( )内%

	0～ 5分	6～ 10分	11～ 15分	16～ 20分	21分 以上
5年生	35 (52.2)	20 (29.9)	11 (16.4)	0 (0.0)	1 (1.5)
6年生	34 (60.7)	18 (32.1)	4 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	69 (56.1)	38 (30.9)	15 (12.2)	0 (0.0)	1 (0.8)

表39 被選択者数——学校内の交友関係 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5年生	男	27 (73.0)	4 (10.8)	6 (16.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	29 (96.7)	1 (3.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	56 (83.6)	5 (7.5)	6 (9.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6年生	男	28 (73.7)	6 (15.8)	3 (7.9)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	16 (88.9)	1 (5.6)	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	44 (78.6)	7 (12.5)	4 (7.1)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	男	55 (73.3)	10 (13.3)	9 (12.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	45 (93.8)	2 (4.2)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	総計	100 (81.3)	12 (9.8)	10 (8.1)	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)

であった。徒歩の相対的な少なさは、通塾距離がやや遠い事を示唆するデータであろう。

表38では通塾時間をまとめた。これによれば0～5分の者が約半数を占めている。そして87%の者が10分以内の時間で通っている。時間的には多くを要しない距離から通う者が多い。ただしそれは表37からもうかがえるように、自転車の使用によっている事には留意すべきである。

## (2) 被選択者数

### a. 学校内での交友関係での被選択者数

学校内の交友関係での被選択者数は表39に示した。5人制限枠一杯にまで書いた者は全体の81.3%であった。4人選択以上をまとめれば90%をこえる。学年間ではやや6年生の方が選択人数が少ない傾向がうかがえるが、その差は大きいものではなかった。性差では女子の方が5人枠一杯まで書く者が多い。これは全体でも、学年別でも認められた。

表40 被選択者数——学校外の交友関係 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	13 (35.1)	6 (16.2)	11 (29.7)	6 (16.2)	1 (2.7)	0 (0.0)
	女	9 (30.0)	10 (33.3)	7 (23.3)	3 (10.0)	1 (3.3)	0 (0.0)
	計	22 (32.8)	16 (23.9)	18 (26.9)	9 (13.4)	2 (3.0)	0 (0.0)
6年生	男	14 (36.8)	7 (18.4)	9 (23.7)	7 (18.4)	1 (2.6)	0 (0.0)
	女	7 (38.9)	3 (16.7)	3 (16.7)	3 (16.7)	2 (11.1)	0 (0.0)
	計	21 (37.5)	10 (17.9)	12 (21.4)	10 (17.9)	3 (5.4)	0 (0.0)
合計	男	27 (36.0)	13 (17.3)	20 (26.7)	13 (17.3)	2 (2.7)	0 (0.0)
	女	16 (33.3)	13 (27.1)	10 (20.8)	6 (12.5)	3 (6.3)	0 (0.0)
	総計	43 (35.0)	26 (21.1)	30 (24.4)	19 (15.4)	5 (4.1)	0 (0.0)

## b. 学校外の交友関係での被選択者数

表40には学校外の友人選択数を示した。これによれば、5人枠一杯に友人を書いた者は35%であった。ついで3人の24.4%，4人の21.1%である。学年間では、顕著な差は認められない。又性差も人数のカテゴリー毎には多少の違いはあるが、総じて大きいものではなかった。

## c. 塾の交友関係 (仲良し) での被選択者数

表41は塾での仲良しの友人の数をまとめた。これによれば、5人の友人を書いた者は45%弱であり、4人、3人の記入者はそれぞれ20%前後であった。0人とする者は3名いた。5年生と6年生とでは、5年生の方が、5人を書いた者が多く、塾での交友は5年生の方がやや広いように思われる。一方、性差については顕著ではないが、やや女子の方が選択人数が多い結果であった。

表41 被選択者数——塾の交友関係 (仲良し) ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	18 (48.6)	7 (18.9)	8 (21.6)	1 (2.7)	3 (8.1)	0 (0.0)
	女	16 (53.3)	5 (16.7)	5 (16.7)	2 (6.7)	0 (0.0)	2 (6.7)
	計	34 (50.7)	12 (17.9)	13 (19.4)	3 (4.5)	3 (4.5)	2 (3.0)
6年生	男	14 (36.8)	4 (10.5)	9 (23.7)	7 (18.4)	3 (7.9)	1 (2.6)
	女	7 (38.9)	6 (33.3)	4 (22.2)	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	21 (37.5)	10 (17.9)	13 (23.2)	8 (14.3)	3 (5.4)	1 (1.8)
合計	男	32 (42.7)	11 (14.7)	17 (22.7)	8 (10.7)	6 (8.0)	1 (1.3)
	女	23 (47.9)	11 (22.9)	9 (18.8)	3 (6.3)	0 (0.0)	2 (4.2)
	総計	55 (44.7)	22 (17.9)	26 (21.1)	11 (8.9)	6 (4.9)	3 (2.4)

## d. 塾の交友関係（教え合い）での被選択者数

塾での教え合い関係での友人数は表42に示した。全体の1/4弱が5人を記入したが残り3/4強はそれ以下の人数である。1人しか記入しない者も18%程度と比較的多数みられた。学年間の差，性差などでは顕著なものは見出されない。

## e. 各基準間の応答の相違

まず仲良し関係についてたずねた3つの事態，すなわち学校内，学校外，塾の間での比較をしたい。

学校内の仲良し人数が中でも最も多い。一方，学校外，塾はそれよりも相当記入人数が少ない傾向がみられる。中でも学校外は塾と比較してさらに少ない結果であった。塾での交友のひろがり，学校内の友人に比べると小さい。しかし学校外の友人よりは多い数が存在する傾向を認めることができるであろう。

表42 被選択者数——塾の交友関係（教え合い） ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	7 (18.9)	8 (21.6)	5 (13.5)	9 (24.3)	7 (18.9)	1 (2.7)
	女	11 (36.7)	6 (20.0)	5 (16.7)	4 (13.3)	3 (10.0)	1 (3.3)
	計	18 (26.9)	14 (20.9)	10 (14.9)	13 (19.4)	10 (14.9)	2 (3.0)
6年生	男	9 (23.7)	6 (15.8)	6 (15.8)	5 (13.2)	8 (21.1)	4 (10.5)
	女	3 (16.7)	6 (33.3)	3 (16.7)	2 (11.1)	4 (22.2)	0 (0.0)
	計	12 (21.4)	12 (21.4)	9 (16.1)	7 (12.5)	12 (21.4)	4 (7.1)
合計	男	16 (21.3)	14 (18.7)	11 (14.7)	14 (18.7)	15 (20.0)	5 (6.7)
	女	14 (29.2)	12 (25.0)	8 (16.7)	6 (12.5)	7 (14.6)	1 (2.1)
	総計	30 (24.4)	26 (21.1)	19 (7.3)	20 (16.3)	22 (17.9)	6 (4.9)

塾での2基準間では、仲よし人数の方が教え合い人数よりも多い結果であった。

性差、学年差は基準によっては少しずつ指摘されたが、各基準を通してとくに特徴としてかかげるべき側面は見出されなかった。

### (3) 被選択者の内訳

#### a. 学校内の友人の属性

表43には学校内の友人を属性別に分けて示した。これによれば、同学年・同クラス・同性の者が65%弱で最も多く、つづいて同学年・異クラス・同性の者が29%を占めた。異性は同クラスの中に1%弱みられたにすぎなかった。又異学年の選択は5.3%と、これも多いものではなかった。

学年差、性差は大きいものではなかった。

#### b. 学校外の友人の属性

表43 被選択者の内訳——学校内交友関係 ( )内%

		同 学 年				異 学 年			
		同クラス		異クラス		上 級		下 級	
		同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5 年 生	男	112 (66.6)	0 (0.0)	45 (26.8)	0 (0.0)	5 (3.0)	0 (0.0)	6 (3.6)	0 (0.0)
	女	95 (63.8)	2 (1.3)	40 (26.8)	0 (0.0)	5 (3.4)	0 (0.0)	7 (4.7)	0 (0.0)
	計	207 (65.3)	2 (3.8)	85 (26.8)	0 (0.0)	10 (3.2)	0 (0.0)	13 (4.1)	0 (0.0)
6 年 生	男	118 (67.4)	0 (0.0)	54 (30.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.7)	0 (0.0)
	女	50 (57.5)	3 (3.4)	29 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (5.7)	0 (0.0)
	計	168 (64.1)	3 (1.1)	83 (31.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (3.1)	0 (0.0)
合 計	男	230 (67.1)	0 (0.0)	99 (28.9)	0 (0.0)	5 (1.5)	0 (0.0)	9 (2.6)	0 (0.0)
	女	145 (61.4)	5 (2.1)	69 (29.2)	0 (0.0)	5 (2.1)	0 (0.0)	12 (5.1)	0 (0.0)
	総計	375 (64.8)	5 (0.9)	168 (29.0)	0 (0.0)	10 (1.7)	0 (0.0)	21 (3.6)	0 (0.0)

表44には学校外の友人の属性を分けて示した。これによれば、同学校・同学年・同性の友人が36%程で最も多く、ついで同学校・同学年・同クラス・同性の者が31%程度選ばれた。これらは、同学校・同学年・同性という属性で共通している。

一方、異学年との交友は、同じ学校の上、下級生を合せて25%弱、又別の学校の者をさらに合わせて28%ほどであった。友人の4人に1人強は異年齢の者ということになる。上級、下級の別では、前者が5.9%、後者が22.5%であった。同じ学校に上級生も下級生も存在する5年生についても、やはり下級生の占める割合の方が高い結果であった。

学年別には大きな差は認められないが、やや6年生で異クラスへの友人の広がりが多くみられる傾向はあった。又、6年生の方が下級生を選ぶ割合がやや高いように思われた。性差としては、同クラス・同性を男子の方が多く選ぶ傾向が指摘できる。又、別の学校の友人は男子は4%であるのに対し、女子は13%とやや女子で多い傾向が認められた。又、異学年の友人は男子が25.2%であるのに対し、女子は34.5%とこれもやや女子で多い傾向が認められた。

異性の選択は1.5%と少数であった。別の学校からの選択は7.4%とこれも多いものではなかった。

#### c. 塾の友人（仲良し）の属性

表45には塾の仲良し関係で選ばれた者の属性を示した。これによれば、同学校・同学年・異クラス・同性の友人が最も多く選ばれ、ついで別の学校・同学年・同性の友人が選ばれた。又3番目に多いのは同学校・同学年・同クラス・同性であり、同学年、同性という属性が最も多くみられたのである。

一方、異学年との交友は、同じ学校の者で1.6%、別の学校とあわせて3.3%と非常に少ないものであった。

学年別にはほとんど差は認められなかった。性差は、男子が女子に比べて同学年・同クラス・同性を多く選び、又同学校・同学年・異クラス・同性も多く選び、一方、別の学校・同学年・同性を選ぶ事が少ないという形



表44 被選択者の内訳—学校外交友関係 ( )内%

	同じ学校										別の学校							
	同学年					異学年					同学年			異学年				
	同クラス		異クラス		異級	上級		下級		異級	同性		異性		同性		異性	
	同性	異性	同性	異性		同性	異性	同性	異性		同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5年生	男	55 (41.0)	0 (0.0)	46 (34.3)	0 (0.0)	10 (7.5)	0 (0.0)	21 (15.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	30 (26.8)	1 (0.9)	36 (32.1)	1 (0.9)	6 (5.4)	0 (0.0)	20 (17.9)	0 (0.0)	14 (12.5)	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	3 (2.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	計	85 (34.6)	1 (0.4)	82 (33.3)	1 (0.4)	16 (6.5)	0 (0.0)	41 (16.7)	0 (0.0)	14 (5.7)	0 (0.0)	3 (1.2)	0 (0.0)	3 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
6年生	男	44 (30.6)	0 (0.0)	60 (41.7)	1 (0.7)	0 (0.0)	30 (20.8)	0 (0.0)	2 (1.4)	0 (0.0)	6 (4.3)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	13 (20.3)	0 (0.0)	21 (32.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	21 (32.8)	4 (6.3)	1 (1.6)	0 (0.0)	2 (3.1)	0 (0.0)	2 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	計	57 (27.4)	0 (0.0)	81 (38.9)	1 (0.5)	0 (0.0)	51 (24.5)	4 (1.9)	3 (1.4)	0 (0.0)	8 (3.8)	0 (0.0)	3 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
合計	男	99 (35.6)	0 (0.0)	106 (38.1)	1 (0.4)	10 (3.6)	0 (0.0)	51 (18.3)	0 (0.0)	2 (0.7)	0 (0.0)	8 (2.9)	0 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	女	43 (24.4)	1 (0.6)	57 (32.4)	1 (0.6)	6 (3.4)	0 (0.0)	41 (23.3)	4 (2.3)	15 (8.5)	0 (0.0)	3 (1.7)	0 (0.0)	5 (2.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	総計	142 (31.3)	1 (0.2)	163 (35.9)	2 (0.4)	16 (3.5)	0 (0.0)	92 (20.3)	4 (0.9)	17 (3.7)	0 (0.0)	11 (2.4)	0 (0.0)	6 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

表45 被選状者の内訳一塾の交友関係(仲よし) ( )内%

	同じ						別の					
	同学年			異学年			同学年			異学年		
	同クラス	異クラス	異性	同性	異性	同性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5年生	男	37 (25.3)	0 (0.0)	68 (46.6)	0 (0.0)	2 (1.4)	0 (0.0)	2 (1.4)	0 (0.0)	37 (25.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	30 (24.2)	0 (0.0)	54 (43.5)	0 (0.0)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0.0)	36 (29.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	67 (24.8)	0 (0.0)	122 (45.2)	0 (0.0)	4 (1.5)	1 (0.4)	2 (0.7)	73 (27.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6年生	男	41 (31.8)	0 (0.0)	70 (54.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (12.4)	0 (0.0)	2 (1.6)	0 (0.0)
	女	6 (8.2)	1 (1.4)	26 (35.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	34 (46.6)	0 (0.0)	3 (4.1)	1 (1.4)
	計	47 (23.3)	1 (0.5)	96 (47.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.5)	50 (24.8)	0 (0.0)	5 (2.5)	1 (0.5)
合計	男	78 (28.4)	0 (0.0)	138 (50.2)	0 (0.0)	2 (0.7)	0 (0.0)	2 (0.7)	53 (19.3)	0 (0.0)	2 (0.7)	0 (0.0)
	女	36 (18.3)	1 (0.5)	80 (40.6)	0 (0.0)	2 (1.0)	1 (0.5)	1 (0.5)	70 (35.5)	0 (0.0)	4 (2.0)	1 (0.5)
	総計	114 (24.2)	1 (0.2)	218 (46.2)	0 (0.0)	4 (0.8)	1 (0.2)	3 (0.6)	123 (26.1)	0 (0.0)	6 (1.3)	1 (0.2)

でみられた。この差はとくに6年生の男子、女子の間で強くみられた結果である。

異性の選択は0.6%と少ないものであった。別の学校から選んだ友人は27.8%と1/4をこす数である。

#### d. 塾の交友関係 (教え合い) の属性

表46では塾での教え合いによる友人の属性をまとめた。ここでは、同学校・同学年・異クラス・同性が50%をこえて最も多いことが示された。又、別の学校の同学年・同性と、同学校・同学年・同クラス・同性がそれぞれ23%前後を占めた。同学年の同性がほとんどを占める結果であった。異学年との交友は同じ学校内で2人、別の学校の者を入れても7人(2%)にとどまった。

学年別には、5年生で別の学校・同学年・同性がやや多いようにみえたが、全体的には大きな差は見出されなかった。性差については、男子で同学校・同学年・同クラス・同性が女子に比べて多いのに対して、女子は別の学校の同学年・同性が多い傾向がみられた。この差はとくに6年生の性差で顕著であった。異性を選択する割合は小さいものであった。

#### e. 各基準間の被選択者の属性の相違

学校内、学校外、塾の3場面での仲良し関係では、すべての基準で同学校・同学年・同性の割合が大きい結果であった。しかし、学校内に比べて、学校外では同学校の下級生・同性の割合が大きく、又、塾では別の学校・同学年・同性が多いという特徴がそれぞれ示された。学校外では年齢異質集団の成立がやや多く、塾では別の学校の者との交友が成立しうる事を示す結果であった。

学年間の差異、性差については、基準間で多少の特徴がみられたが、それらは各基準の個所に言及した。異性の選択はそれぞれ少ない結果であった。

塾の2基準 (仲良し、教え合い) の間では顕著な差は認められなかった。

### (4) 選択の内訳——選択者の分類からの分析

#### a. 学校内の友人の内訳

表46 被選択者の内訳一塾の交友関係(教え合い) ( )内%

	同じ						別の					
	同学年			異学年			同学年			異学年		
	同クラス		異クラス	同級		異級	同級		異級	同級		異級
	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5年生	男	27 (25.2)	0 (0.0)	52 (48.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	27 (25.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	21 (19.8)	0 (0.0)	52 (49.1)	2 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	30 (28.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	48 (22.5)	0 (0.0)	104 (48.8)	2 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.5)	0 (0.0)	57 (26.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6年生	男	31 (29.0)	0 (0.0)	60 (56.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (12.1)	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)
	女	4 (9.5)	1 (2.4)	20 (47.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (35.7)	0 (0.0)	1 (2.4)	0 (0.0)
	計	35 (23.5)	1 (0.7)	80 (53.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (18.8)	0 (0.0)	3 (2.0)	0 (0.0)
合計	男	58 (27.1)	0 (0.0)	112 (52.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.5)	0 (0.0)	40 (18.7)	0 (0.0)	2 (0.9)	0 (0.0)
	女	25 (16.9)	1 (1.4)	72 (48.6)	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	45 (30.4)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)
	総計	83 (22.9)	1 (1.3)	184 (50.8)	2 (0.6)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	85 (23.5)	0 (0.0)	3 (0.8)	0 (0.0)

表47 選択の内訳——学校内交友関係

( )内%

		同 学 年				異 学 年			
		同クラス		異クラス		上 級		下 級	
		同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
5 年生	男	37 (100.0)	0 (0.0)	23 (62.2)	0 (0.0)	5 (13.5)	0 (0.0)	6 (16.2)	0 (0.0)
	女	30 (100.0)	0 (0.0)	23 (76.7)	0 (0.0)	3 (10.0)	0 (0.0)	7 (23.3)	0 (0.0)
	計	67 (100.0)	0 (0.0)	46 (68.7)	0 (0.0)	8 (11.9)	0 (0.0)	13 (19.4)	0 (0.0)
6 年生	男	38 (100.0)	0 (0.0)	24 (63.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (10.5)	0 (0.0)
	女	17 (94.4)	1 (5.6)	16 (88.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (22.2)	0 (0.0)
	計	55 (98.2)	1 (1.8)	40 (71.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (14.3)	0 (0.0)
合 計	男	75 (100.0)	0 (0.0)	47 (62.7)	0 (0.0)	5 (6.7)	0 (0.0)	10 (13.3)	0 (0.0)
	女	47 (97.9)	1 (2.1)	39 (81.3)	0 (0.0)	3 (6.3)	0 (0.0)	11 (22.9)	0 (0.0)
	総計	122 (99.2)	1 (0.8)	86 (69.9)	0 (0.0)	8 (6.5)	0 (0.0)	21 (17.1)	0 (0.0)

表47では学校内の友人に関する結果を示した。これによれば、ほぼ100%の者が同学年・同クラス・同性の友人を少なくとも1人は記入している事が示されている。同学年・異クラス・同性の友人はそれにつき、70%の者が選んでいる。

学年間では大きな差はみられなかった。性差では、女子が男子に比べて同学年・異クラス・同性と、下級生・同性を選ぶ割合が高い点が指摘できた。異性との交友は少ない。異学年との交友は上級生を6.5%、下級生を17.1%の者が少なくとも1人は選ぶ結果がみられた。

#### b. 学校外の友人の内訳

表48では学校外の友人に関する結果を示した。ここでは同学校・同学年・同クラス・同性の友人を選んだ者は70%弱であり、必ずしも全員の者ではない事が示された。むしろほぼ同じ割合で同学校・同学年・異クラス

表48 選択の内訳—学校外交友関係 ( )内%

	同じ						別の							
	同 学 年			異 学 年			同 学 年			異 学 年				
	同クラス	異クラス	異クラス	同クラス	異クラス	異クラス	同クラス	異クラス	異クラス	同クラス	異クラス	異クラス		
5 年 生	男	28 (75.7)	0 (0.0)	22 (59.5)	0 (0.0)	8 (21.6)	0 (0.0)	12 (32.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	21 (70.0)	0 (0.0)	24 (80.0)	1 (3.3)	6 (20.0)	0 (0.0)	13 (43.3)	0 (0.0)	8 (26.7)	0 (0.0)	1 (3.3)	2 (6.7)	0 (0.0)
	計	49 (73.1)	0 (0.0)	46 (68.7)	1 (1.5)	14 (20.9)	0 (0.0)	25 (37.3)	0 (0.0)	8 (11.9)	0 (0.0)	3 (4.5)	2 (3.0)	0 (0.0)
6 年 生	男	26 (68.4)	0 (0.0)	29 (76.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (52.6)	0 (0.0)	3 (7.9)	0 (0.0)	3 (7.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	9 (50.0)	0 (0.0)	10 (55.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (55.6)	3 (16.7)	1 (5.6)	0 (0.0)	1 (5.6)	0 (0.0)	2 (11.1)	0 (0.0)
	計	35 (62.5)	0 (0.0)	39 (69.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	30 (53.6)	3 (5.4)	4 (7.1)	0 (0.0)	4 (7.1)	0 (0.0)	2 (3.6)	0 (0.0)
合 計	男	54 (72.0)	0 (0.0)	51 (68.0)	0 (0.0)	8 (10.7)	0 (0.0)	32 (42.7)	0 (0.0)	3 (4.0)	0 (0.0)	5 (6.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	30 (62.5)	0 (0.0)	34 (70.8)	1 (2.1)	6 (12.5)	0 (0.0)	23 (47.9)	3 (6.3)	9 (18.8)	0 (0.0)	2 (4.2)	4 (8.3)	0 (0.0)
	総計	84 (68.3)	0 (0.0)	85 (69.1)	1 (0.8)	14 (11.4)	0 (0.0)	55 (44.7)	3 (2.4)	12 (9.8)	0 (0.0)	7 (5.7)	4 (3.3)	0 (0.0)

同性の友人が選択される結果がみられた。又、同学校・下級・同性も45%近くの者が選んだ。同学校・上級・同性は10%をこえる者が選択をした。

学年間では、5年生が同学校・同学年・同クラス・同性の者をやや多く選択し、同学校・下級生・同性を選ぶのは6年生が多い傾向がみられた。性差は、同学校・同学年・同クラス・同性を男子が多く選んだのに対し、女子は別の学校・同学年・同性を男子に比べて多く選んでいる。異性をあげた者は全体に少なかった。又、別の学校の友人をあげた者は同学年・同性で10%ほどみられた。

#### c. 塾の友人 (仲良し) の内訳

表49には塾の仲良し関係の結果を示した。ここでは、同学校・同学年・異クラスの友人を84.6%の者が少なくとも1人はあげている結果を示した。一方、同学校・同学年・同クラス・同性は57%と、表47、表48の結果に比べて少ない。別の学校・同学年・同性は54.5%であり、塾の交友の1つの特徴となる結果としてあらわれた。異学年の者を選ぶ割合は、少ない結果であった。異性の選択はさらに少ない結果であった。

学年間では、別の学校・同学年・同性を5年生が多く選ぶ傾向がみられた他には、とくに差は認められなかった。性差は、同じ学校・同学年・同クラス・同性を男子が多く選び、又別の学校・同学年・同性を女子が多く選ぶ傾向として示された。この性差は6年生でとくに顕著であった。

#### d. 塾の友人 (教え合い) の内訳

表50には塾での教え合い関係の結果を示した。これによれば、同学校・同学年・異クラス・同性を選んだ者が70%強で最も多い。それについて、同学校・同学年・同クラス・同性と、別の学校・同学年・同性が共に47~49%で多いものであった。異学年、異性の選択は非常に少ない結果であった。

学年間では、同学校・同学年・異クラス・同性と、別の学校・同学年・同性の選択で、5年生の方が高い傾向を認める事ができた。性差では、女子に比べて男子の方が、同学校内の同性の選択が多く、別の学校の同性の選択が少ない傾向がみられた。

表49 選択の内訳一塾の交友関係(仲良し) ( )内%

	同じ						別					
	同 学 年			異 学 年			同 学 年			異 学 年		
	同 性	異 性	異 クラス	同 性	異 性	異 クラス	同 性	異 性	異 クラス	同 性	異 性	異 クラス
5 年 生	男	21 (56.8)	0 (0.0)	33 (89.2)	0 (0.0)	2 (5.4)	0 (0.0)	1 (2.7)	0 (0.0)	22 (59.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	17 (56.7)	0 (0.0)	26 (86.7)	0 (0.0)	2 (6.7)	1 (3.3)	0 (0.0)	20 (66.7)	0 (0.0)	2 (6.7)	0 (0.0)
	計	38 (56.7)	0 (0.0)	59 (88.1)	0 (0.0)	4 (6.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	42 (62.7)	0 (0.0)	2 (3.0)	0 (0.0)
6 年 生	男	26 (68.4)	0 (0.0)	32 (84.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (23.7)	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)
	女	6 (33.3)	1 (5.6)	13 (72.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.6)	16 (88.9)	0 (0.0)	2 (11.1)	1 (5.6)
	計	32 (57.1)	1 (1.8)	45 (80.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	25 (44.6)	0 (0.0)	3 (5.4)	1 (1.8)
合 計	男	47 (62.7)	0 (0.0)	65 (86.7)	0 (0.0)	2 (2.7)	0 (0.0)	1 (1.3)	31 (41.3)	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)
	女	23 (47.9)	1 (2.1)	39 (81.3)	0 (0.0)	2 (4.2)	1 (2.1)	1 (2.1)	36 (75.0)	0 (0.0)	4 (8.3)	1 (2.1)
	総計	70 (56.9)	1 (0.8)	104 (84.6)	0 (0.0)	4 (3.3)	1 (0.8)	2 (1.6)	67 (54.5)	0 (0.0)	5 (4.1)	1 (0.8)



表50 選択の内訳一塾の交友関係 (教え合い) ( )内%

	同じ						別の					
	同 学 年			異 学 年			同 学 年			異 学 年		
	同クラス	異クラス	異クラス	同性	異性	異性	同性	異性	異性	同性	異性	異性
5年生	男	18 (48.6)	0 (0.0)	33 (89.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.7)	0 (0.0)	16 (43.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	女	14 (46.7)	0 (0.0)	20 (66.7)	1 (3.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	19 (63.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	32 (47.8)	0 (0.0)	53 (79.1)	1 (1.5)	0 (0.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	35 (52.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6年生	男	23 (60.5)	0 (0.0)	23 (60.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (26.3)	2 (5.3)	1 (2.6)	0 (0.0)
	女	5 (27.8)	1 (5.6)	11 (61.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (72.2)	1 (5.6)	1 (5.6)	0 (0.0)
	計	28 (50.0)	1 (1.8)	34 (60.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	23 (41.1)	3 (5.4)	2 (3.6)	0 (0.0)
合計	男	41 (54.7)	0 (0.0)	56 (74.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	26 (34.7)	2 (2.7)	1 (1.3)	0 (0.0)
	女	19 (39.6)	1 (2.1)	31 (64.6)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	32 (66.7)	1 (2.1)	1 (2.1)	0 (0.0)
	総計	60 (48.8)	1 (0.8)	87 (70.7)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	58 (47.2)	3 (2.4)	2 (1.6)	0 (0.0)

## e. 各選択基準間の相違

各基準通して同学年・同性の選択割合が大きい。仲良し関係をたずねた3基準間では、学校内で同クラス・同性の選択が非常に大きい点、学校外では同学校・下級・同性から比較的多く選ぶ点、塾では別の学校・同学年・同性を多く選び、又、同学校・異クラス・同性をやや多く選ぶ傾向が認められた。すなわち、学校外では異年齢交友の機会が多く、塾では別の学校の友人への交友のひろがりが見られる結果であった。

塾事態での2基準間、すなわち、仲良しと教え合いの間では、後者での割合がやや小さくはなるが、類似の結果であった。

## (5) 各選択基準間の被選択者の一致人数

## a. 学校内の友人と学校外の友人の一致

表51には学校内、学校外の友人の一致人数を示した。これによれば1人～3人一致にそれぞれ22～25%程度がらばり、この3項目で約80%を

表51 学校内の友人と学校外の友人の一致人数 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	1 (2.7)	3 (8.1)	12 (32.4)	11 (29.7)	7 (18.9)	3 (8.1)
	女	0 (0.0)	2 (6.7)	5 (16.7)	12 (40.0)	7 (23.3)	4 (13.3)
	計	1 (1.5)	5 (7.5)	17 (25.4)	23 (34.3)	14 (20.9)	7 (10.4)
6年生	男	2 (5.3)	5 (13.2)	8 (21.1)	6 (15.8)	8 (21.1)	9 (23.7)
	女	0 (0.0)	3 (16.7)	2 (11.1)	2 (11.1)	7 (38.9)	4 (22.2)
	計	2 (3.6)	8 (14.3)	10 (17.9)	8 (14.3)	15 (26.8)	13 (23.2)
合計	男	3 (4.0)	8 (10.7)	20 (26.7)	17 (22.7)	15 (20.0)	12 (16.0)
	女	0 (0.0)	5 (10.4)	7 (14.6)	14 (29.2)	14 (29.2)	8 (16.7)
	総計	3 (2.4)	13 (10.6)	27 (22.0)	31 (25.2)	29 (23.6)	20 (16.3)

表52 学校内の友人と塾の友人(仲良し)の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.4)	9 (24.3)	9 (24.3)	17 (45.9)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.3)	6 (20.0)	10 (33.3)	13 (43.3)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.5)	15 (22.4)	19 (28.4)	30 (44.8)
6 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (7.9)	20 (52.6)	15 (39.5)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (16.7)	5 (27.8)	10 (55.6)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (10.7)	25 (44.6)	25 (44.6)
合 計	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.7)	12 (16.0)	29 (38.7)	32 (42.7)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.1)	9 (18.8)	15 (31.3)	23 (47.9)
	総計	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.4)	21 (17.1)	44 (35.8)	54 (44.7)

占めた。一人も一致しないとする者は16%強と少ないものではなかった。それに対して5人一致は2.4%と少ない結果であった。

学年差では、6年生の方が不一致の人数が多い傾向であった。性差は、大きいものではないが、やや女子の方が不一致の多い傾向であった。

#### b. 学校内の友人と塾の友人(仲良し)の一致

表52は、学校内の友人と塾の仲良し関係の一致人数を示したものである。ここでは一致0人が45%程度で最も多く、ついで1人の35.8%であった。5人、4人の一致はともに0であった。総じて一致度は低い。

学年間の比較では、5年生でやや一致人数が多い。性差は学年別には多少みられるが、総じて大きいものではなかった。

#### c. 学校内の友人と塾の友人(教え合い)の一致

表53は、学校内の友人と塾での教え合い関係の一致を示したものであ

表53 学校内の友人と塾の友人(教え合い)の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.4)	8 (21.6)	9 (24.3)	18 (48.6)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (26.7)	9 (30.0)	13 (43.3)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.0)	16 (23.9)	18 (26.9)	31 (46.3)
6 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (7.9)	16 (42.1)	19 (50.0)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (16.7)	4 (22.2)	11 (61.1)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (10.7)	20 (35.7)	30 (53.6)
合 計	男	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.7)	11 (14.7)	25 (33.3)	37 (49.3)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (22.9)	13 (27.1)	24 (50.0)
	総計	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.6)	22 (17.9)	38 (30.9)	61 (49.6)

る。ここでは表52とほぼ同様の結果をみた。

#### d. 学校外の友人と塾の友人(仲良し)の一致

学校外の友人と塾の仲良しの一致人数は表54に示した。全体では45%程度が一致人数0であり、1人一致の者が31.7%でそれについだ。総じて2つの基準間での友人の一致度は低いものであった。

学年間の比較では、6年生で一致人数が少なく、性差は男子で1人一致がやや多いが、全体的には大きいものではなかった。ただし6年生では女子の一致人数が少ない傾向が相当あきらかな結果として示された。

#### e. 学校外の友人と塾の友人(教え合い)の一致

表55には学校外の友人と塾の教え合いによる友人の一致人数を示した。そこでは、1名以上の一致を示した者は少なく、1名の一致もない者が全体の60%を占めた。学校外の友人と塾の教え合い関係の一致度は低い結果

表54 学校外の友人と塾の友人(仲良し)の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	1 (2.7)	2 (5.4)	9 (24.3)	8 (21.6)	17 (45.9)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (10.0)	8 (26.7)	7 (23.3)	12 (40.0)
	計	0 (0.0)	1 (1.5)	5 (7.5)	17 (25.4)	15 (22.4)	29 (43.3)
6 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.6)	3 (7.9)	19 (50.0)	15 (39.5)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (11.1)	5 (27.8)	11 (61.1)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	5 (8.9)	24 (42.9)	26 (46.4)
合 計	男	0 (0.0)	1 (1.3)	3 (4.0)	12 (16.0)	27 (36.0)	32 (42.7)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.0)	10 (20.8)	12 (25.0)	23 (47.9)
	総計	0 (0.0)	1 (0.8)	6 (4.9)	22 (17.9)	39 (31.7)	55 (44.7)

表55 学校外の友人と塾の友人(教え合い)の一致人数 ( )内%

		5 人	4 人	3 人	2 人	1 人	0 人
5 年生	男	0 (0.0)	1 (2.7)	0 (0.0)	8 (21.6)	7 (18.9)	21 (56.8)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (13.3)	6 (20.0)	6 (20.0)	14 (46.7)
	計	0 (0.0)	1 (1.5)	4 (6.0)	14 (20.9)	13 (19.4)	35 (52.2)
6 年生	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.3)	10 (26.3)	26 (68.4)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (27.8)	13 (72.2)
	計	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.6)	15 (26.8)	39 (69.6)
合 計	男	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	10 (13.3)	17 (22.7)	47 (62.7)
	女	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (8.3)	6 (12.5)	11 (22.9)	27 (56.3)
	総計	0 (0.0)	1 (0.8)	4 (3.3)	16 (13.0)	28 (22.8)	74 (60.2)

であった。学年間では6年生での一致度の低さが顕著であった。性差は大きいものではなかった。

f. 塾の友人での仲良しと教え合いの一致

表56には塾についての2基準間の一致人数を示した。ここでは一致は2人が27.6%で最も多く、残りのカテゴリーはそれぞれ10~20%を占めた。中では5人一致が9.8%と最も少ないものであった。同じ塾内の友人関係ではあるが、一致度は必ずしも高くはない。基準による分化がみられたのである。

学年間では5年生がやや一致度が高い。性差は女子で一致度が高いという形であらわれた。

g. 各基準間の一致を通しての検討

仲良しという基準で質問した学校内、学校外、塾の3基準間の一致度では、学校内と学校外との一致が最も多く、学校内と塾、学校外と塾の友人

表56 塾の友人(仲良しと)塾の友人(教え合い)の一致人数 ( )内%

		5人	4人	3人	2人	1人	0人
5年生	男	2 (5.4)	3 (8.1)	10 (27.0)	12 (32.4)	7 (18.9)	3 (8.1)
	女	6 (20.0)	6 (20.0)	5 (16.7)	9 (30.0)	2 (6.7)	2 (6.7)
	計	8 (11.9)	9 (13.4)	15 (22.4)	21 (31.3)	9 (13.4)	5 (7.5)
6年生	男	3 (7.9)	5 (13.2)	5 (13.2)	8 (21.1)	9 (23.7)	8 (21.1)
	女	1 (5.6)	5 (27.8)	3 (16.7)	5 (27.8)	3 (16.7)	1 (5.6)
	計	4 (7.1)	10 (17.9)	8 (14.3)	13 (23.2)	12 (21.4)	9 (16.1)
合計	男	5 (6.7)	8 (10.7)	15 (20.0)	20 (26.7)	16 (21.3)	11 (14.7)
	女	7 (14.6)	11 (14.7)	8 (10.7)	14 (18.7)	5 (6.7)	3 (4.0)
	総計	12 (9.8)	19 (15.4)	23 (18.7)	34 (27.6)	21 (17.1)	14 (11.4)

の一致度はともに低いものであった。すなわち塾の交友関係は学校内、学校外の友人とはかなり違った中味をもつ事が示されたのである。

塾の友人のうち、仲良しと教え合いの友人一致度は、他の基準間組合わせの結果に比べると高いものであった。しかしそれでも絶対的には高いものでなく、塾内の交友関係とはいえ、基準による分化を示す事が明らかにみられたのである。

#### (6) 選択理由の内訳

##### a. 学校内の友人の選択理由

表57には学校内の友人の選択理由を示した。全体では「尊敬・共鳴」が最も多くあげられたが、一方ほぼ同数の者が「同情・愛着」を理由として選んでいる。「相互的接近」は22%であった。又「集団的接近」は7.7%と少ないものであった。

学年間では大きな差は認められなかった。性差は、女子で「相互的接

表57 選択理由内訳——学校内の友人 ( )内%

		相互的 接 近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集団的 協 同	そ の 他
5 年 生	男	22 (13.3)	68 (41.0)	60 (36.1)	13 (7.8)	3 (1.8)
	女	42 (31.3)	33 (24.6)	55 (41.0)	4 (3.0)	0 (0.0)
	計	64 (21.3)	101 (33.7)	115 (38.3)	17 (5.7)	3 (1.0)
6 年 生	男	38 (22.2)	50 (29.2)	63 (36.8)	16 (9.4)	4 (2.3)
	女	20 (23.0)	29 (33.3)	24 (27.6)	10 (11.5)	4 (4.6)
	計	58 (22.5)	79 (30.6)	87 (33.7)	26 (10.1)	8 (3.1)
合 計	男	60 (17.8)	118 (35.0)	123 (36.5)	29 (8.6)	7 (2.1)
	女	62 (28.1)	62 (28.1)	79 (35.7)	14 (6.3)	4 (1.8)
	総計	122 (21.9)	180 (32.3)	202 (36.2)	43 (7.7)	11 (2.0)

近」が多く「同情・愛着」が少ないという結果にみられた。この差は主に5年生の男子、女子の間で強くみられたものである。

### b. 学校外の友人の選択理由

表58には学校外の友人の選択理由を示した。全体に「尊敬・共鳴」が34.4%で最も多く、ついで「相互的接近」の31.3%が多いものであった。又「同情・愛着」も25.4%とほぼ1/4の理由となっている。「集团的協同」は5%と少ないものであった。

学年間では、6年生で「相互的接近」が多い傾向がみられた。性差は全体としては小さいが、「相互的接近」で、5年生、6年生に相殺する性差がみられた。

### c. 塾の友人（仲良し）の選択理由

表59には塾での仲良しの友人の選択理由を示した。これによれば、「同

表58 選択理由内訳——学校外の友人 ( )内%

		相 互 的 接 近	同 情 ・ 愛 着	尊 敬 ・ 共 鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
5年生	男	27 (20.1)	45 (33.6)	48 (35.8)	9 (6.7)	5 (3.7)
	女	35 (36.5)	20 (20.8)	33 (34.4)	4 (4.2)	4 (4.2)
	計	62 (27.0)	65 (28.3)	81 (35.2)	13 (5.7)	9 (3.9)
6年生	男	55 (39.3)	30 (21.4)	44 (31.4)	8 (5.7)	3 (2.1)
	女	16 (29.1)	13 (23.6)	21 (38.2)	1 (1.8)	4 (7.3)
	計	71 (36.4)	43 (22.1)	65 (33.3)	9 (4.6)	7 (3.6)
合 計	男	82 (29.9)	75 (27.4)	92 (33.6)	17 (6.2)	8 (2.9)
	女	51 (33.8)	33 (21.9)	54 (35.8)	5 (3.3)	8 (5.3)
	総計	133 (31.3)	108 (25.4)	146 (34.4)	22 (5.2)	16 (3.8)



表59 選択理由内訳——塾の友人 (仲良し) ( )内%

		相互的 相接 近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
5 年 生	男	11 (7.5)	72 (49.0)	47 (32.0)	10 (6.8)	7 (4.8)
	女	9 (8.3)	46 (42.2)	41 (37.6)	9 (8.3)	4 (3.7)
	計	20 (7.8)	118 (46.1)	88 (34.4)	19 (7.4)	11 (4.3)
6 年 生	男	23 (20.0)	40 (34.8)	40 (34.8)	9 (7.8)	3 (2.6)
	女	12 (14.8)	27 (33.3)	22 (27.2)	6 (7.4)	14 (17.3)
	計	35 (17.9)	67 (34.2)	62 (31.6)	15 (7.7)	17 (8.7)
合 計	男	34 (13.0)	112 (42.7)	87 (33.2)	19 (7.3)	10 (3.8)
	女	21 (11.1)	73 (38.4)	63 (33.2)	15 (7.9)	18 (9.5)
	総計	55 (12.2)	185 (40.9)	150 (33.2)	34 (7.5)	28 (6.2)

情・愛着」が40%をこえて最も多く、ついで「尊敬・共鳴」が33%と多いものであった。この傾向はとくに5年生で大きい。性差では顕著な点はみられなかった。

#### d. 塾の友人 (教え合い) の選択理由

表60には塾での教え合いによる交友関係での選択理由を示した。この結果は先のcの結果と類似するものであった。すなわち「同情・愛着」が40%をこえて最も多く、ついで「尊敬・共鳴」が37%と多いものであった。他のカテゴリーは10%に満たない結果である。

学年間での全体的傾向には大きな差はみられない。又性差も顕著ではなかった。

#### e. 各基準における選択理由の比較

学校内の友人選択理由では「尊敬・共鳴」が最も多く、又「同情・愛着」

表60 選択理由内訳——塾の友人(教え合い) ( )内%

		相互的 接近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
5年生	男	4 (3.7)	54 (50.0)	43 (39.8)	4 (3.7)	3 (2.8)
	女	9 (9.0)	42 (42.0)	39 (39.0)	6 (6.0)	4 (4.0)
	計	13 (6.3)	96 (46.2)	82 (39.4)	10 (4.8)	7 (3.4)
6年生	男	13 (12.7)	42 (41.2)	33 (32.4)	9 (8.8)	5 (4.9)
	女	2 (3.8)	16 (30.2)	19 (35.8)	2 (3.8)	14 (26.4)
	計	15 (9.7)	58 (37.4)	52 (33.5)	11 (7.1)	19 (12.3)
合 計	男	17 (8.1)	96 (45.7)	76 (36.2)	13 (6.2)	8 (3.8)
	女	11 (7.2)	58 (37.9)	58 (37.9)	8 (5.2)	18 (11.8)
総計		28 (7.7)	154 (42.4)	134 (36.9)	21 (5.8)	27 (7.2)

も多い結果であった。この結果は田中（1979）との比較では、今回の被調査者に比べてやや高い学年にみられるものと類似している。「尊敬・共鳴」「同情・愛着」の結果は学校外でも多少類似した結果ではあったが、ここでは又「相互的接近」が多く、他の基準に比べて特異な傾向を示した。塾は「同情・愛着」が2基準とも多い。これは田中（1979）の当該学年の結果と類似している。田中（1979）の資料との照合を通して、やや塾での交友関係にみる選択理由の方が、学校内、学校外のそれに比べて発達的には遅れた段階であるように思われる。

学年差、性差には各基準で個別にとりあげたにとどめる。

#### (7) 被選択者属性別選択理由

##### a. 同学校・同学年・同クラスの友人の選択理由

表61には同学校・同学年・同クラスの友人の選択理由を示した。全般に

表61 被選択者属性別選択理由——同じ学校・同学年・同クラス ( )内%

		相互的 相接近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	18 (7.7)	96 (40.9)	104 (44.3)	13 (5.5)	4 (1.7)
	女	38 (26.0)	41 (28.1)	59 (40.4)	7 (4.8)	1 (0.7)
	計	56 (14.7)	137 (36.0)	163 (42.8)	20 (5.2)	5 (1.3)
6年生	男	54 (24.9)	66 (30.4)	79 (36.4)	16 (7.4)	2 (0.9)
	女	23 (32.4)	17 (23.9)	21 (29.5)	5 (7.0)	5 (7.0)
	計	77 (26.7)	83 (28.8)	100 (34.7)	21 (7.3)	7 (2.4)
合計	男	72 (15.9)	162 (35.8)	183 (40.5)	29 (6.4)	6 (1.3)
	女	61 (28.1)	58 (26.7)	80 (36.9)	12 (5.5)	6 (2.8)
	総計	133 (19.9)	220 (32.9)	263 (39.3)	41 (6.1)	12 (1.8)

「尊敬・共鳴」を理由として選択することが最も多く、ついで「同情・愛着」が多い結果であった。「相互的接近」は20%程度であった。「集团的協同」は6%と多いものではない。学年間では、6年生で「相互的接近」がやや多い傾向がみられた。又、女子は男子に比べて「相互的接近」が多い傾向をみた。この性差はとくに5年生で顕著であった。

異性は「同情・愛着」に4ケース、「尊敬・共鳴」に3ケース、「その他」に5ケースみられた。

#### b. 同学校・同学年・異クラスの友人の選択理由

表62には同学校・同学年・異クラスの友人の選択理由を示した。ここでは「同情・愛着」が39%で最も多く、ついで「尊敬・共鳴」の35%が多いものであった。「相互的接近」は14.3%であり「集团的協同」は7%と多いものではなかった。学年間では大きい差はみられなかった。性差も小さ

表62 被選択者属性別選択理由——同じ学校・同学年・異クラス ( )内%

		相互的 接近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	26 (12.6)	91 (44.2)	63 (30.6)	16 (7.8)	10 (4.9)
	女	20 (12.3)	64 (39.3)	66 (40.5)	11 (6.7)	2 (1.2)
	計	46 (12.5)	155 (42.0)	129 (35.0)	27 (7.3)	12 (3.3)
6年生	男	46 (19.2)	85 (35.4)	87 (36.3)	16 (6.7)	6 (2.5)
	女	9 (9.5)	35 (36.8)	30 (31.6)	7 (7.4)	14 (14.7)
	計	55 (16.4)	120 (35.8)	117 (34.9)	23 (6.9)	20 (6.0)
合計	男	72 (16.1)	176 (39.5)	150 (33.6)	32 (7.2)	16 (3.6)
	女	29 (11.2)	99 (38.4)	96 (37.2)	18 (7.0)	16 (6.2)
	総計	101 (14.3)	275 (39.1)	246 (34.9)	50 (7.1)	32 (4.5)

い結果であった。

異性は「相互的接近」で2ケース、「同情・愛着」,「集团的協同」,「その他」で各1ケースみられた。

### c. 同学校・上級生の友人の選択理由

表63には同学校・上級生の友人の選択理由をまとめた。ただし被調査者

表63 被選択者属性別選択理由——同じ学校・異学年(上級) ( )内%

		相互的 接近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	9 (56.3)	2 (12.5)	3 (18.8)	2 (12.5)	0 (0.0)
	女	9 (75.0)	2 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)
	計	18 (64.3)	4 (14.3)	3 (10.7)	2 (7.1)	1 (3.6)

は5年生に限る。これによれば「相互的接近」が64.3%と最も多い結果であった。その他のカテゴリーは「同情・愛着」,「尊敬・共鳴」が10%をこえたにとどまった。上級生の選択数が全体に少ないため、性差は十分に吟味できなかった。

異性の友人は「集団的協同」で2ケースみられた。

#### d. 同学校・下級生の友人の選択理由

表64には同学校・下級生の友人の選択理由をまとめた。全体的には「相

表64 被選択者属性別選択理由——同じ学校・異学年(下級) ( )内%

		相互的 接 近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
5 年 生	男	9 (36.0)	8 (32.0)	6 (24.0)	1 (4.0)	1 (4.0)
	女	22 (81.5)	1 (3.7)	1 (3.7)	1 (3.7)	2 (7.4)
	計	31 (59.6)	9 (17.3)	7 (13.4)	2 (3.8)	3 (5.8)
6 年 生	男	11 (36.7)	8 (26.7)	8 (26.7)	1 (3.3)	2 (6.7)
	女	8 (30.8)	7 (26.9)	9 (34.6)	0 (0.0)	2 (7.7)
	計	19 (33.9)	15 (26.8)	17 (30.4)	1 (1.8)	4 (7.1)
合 計	男	20 (36.4)	16 (29.1)	14 (25.5)	2 (3.6)	3 (5.5)
	女	30 (56.6)	8 (15.1)	10 (18.9)	1 (1.9)	4 (7.5)
	総計	50 (46.3)	24 (22.2)	24 (22.2)	3 (2.8)	7 (6.5)

相互的接近」が46.3%と最も多く、「同情・愛着」,「尊敬・共鳴」が22%とそれについだ。「集団的協同」は多いものではなかった。学年間では5年生で「相互的接近」が60%弱を占め、「同情・愛着」,「尊敬・共鳴」がそれだけ少なくなっている結果であった。又、女子で「相互的接近」が多い傾向がみられた。これはとくに5年生で強くみられる差であった。

異性は「相互的接近」で4ケースみられたにとどまった。

表65 被選択者属性別選択理由——別の学校・同学年 ( )内%

		相互的 接近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集团的 協同	その他
5年生	男	0 (0.0)	40 (62.5)	22 (34.4)	0 (0.0)	2 (3.1)
	女	0 (0.0)	30 (41.1)	39 (53.4)	4 (5.5)	0 (0.0)
	計	0 (0.0)	70 (51.1)	61 (44.5)	4 (2.9)	2 (1.5)
6年生	男	5 (17.2)	16 (55.2)	3 (10.3)	3 (10.3)	2 (6.9)
	女	1 (1.8)	21 (36.8)	22 (38.6)	6 (10.5)	7 (12.3)
	計	6 (7.0)	37 (43.0)	25 (29.1)	9 (10.5)	9 (10.5)
合計	男	5 (5.4)	56 (60.2)	25 (26.9)	3 (3.2)	4 (4.3)
	女	1 (0.8)	51 (39.2)	61 (46.9)	10 (7.7)	7 (5.4)
	総計	6 (2.7)	107 (48.0)	86 (38.6)	13 (5.8)	11 (4.9)

## e. 別の学校・同学年の友人の選択理由

表65には別の学校・同学年の友人の選択理由をまとめた。ここでは「同情・愛着」が48%で最も多く、ついで「尊敬・共鳴」が38.6%と多いものであった。「相互的接近」は非常に少なく、それよりは「集团的協同」がやや多い結果であった。学年間では、5年生で「尊敬・共鳴」がやや多い結果であった。又男子は女子に比べて「同情・愛着」が多く、一方、女子は「尊敬・共鳴」が多い結果であった。この性差は5年生、6年生を通じてみる事ができた。

異性は「同情・愛着」で1ケースみられた。

## f. 別の学校・異学年の友人の選択理由

学習塾の結果では別の学校の異学年の友人があげられることが少なかった。表66には、同性に限って、上級生、下級生にわけて選択理由別に人数を示した。ケース数が少ないため、参考資料としてかかげるにとどめる。

表66 被選択者属性別選択理由——別の学校・異学年(上級生・下級生)

	相互的 接 近	同情・愛着	尊敬・共鳴	集 団 的 協 同	そ の 他
上 級 生	2	3	1	0	3
下 級 生	2	0	3	0	2

( ) 内%

なお、異性は「その他」に上級生、下級生各1ケースみられたただけであった。

### g. 被選択者の属性による選択理由の相違

表61から表66までの結果から、被選択者の属性によって選択理由に多少の差がある事が認められた。すなわち、同学校・同学年ではクラスの異同にかかわらず、「同情・愛着」、「尊敬・共鳴」がその理由の主流を占めるのに対し、同学校の上級生・下級生を選ぶ理由としては「相互的接近」の占める割合が大きい。別の学校・同学年では、同学校・同学年と同様の項目が多い結果を示した。

全体に「集団的協同」が理由としてあげられる事は少なかった。

## 3. 珠算塾と学習塾の比較

次に、珠算塾と学習塾の調査結果を比較したい。ただし、この2種の通塾者の質については、地域も異なり、又その他の条件(例えば知能、家庭環境など)でのおさえも十分でなく、そこに相違のあることは前提とした方がよい。一定の留保をした上で2つの資料を検討したいと考えるのである。

### (1) 通塾方法、通塾時間についての塾種間比較

通塾方法については、表5と表37との比較で塾種間の違いを吟味できる。それらの結果によれば、珠算塾の方が学習塾に比べて徒歩の者が多く、自転車の者が少ない。すなわち、通塾距離が相対的に短いであろうことが推測されたのである。

通塾時間については、表6と表38との比較によって検討する。これらによれば、通塾時間は学習塾の方がやや短い、しかしその時間は自転車使

用によるものであることは忘れてはならない。

(2) 被選択者数の塾種間比較

a. 学校内の交友関係での被選択者数

表8と表39の比較によれば、学校内の友人数は珠算塾での調査の方がやや多く記される傾向がうかがえるが、顕著な差ではない。ただし学習塾で、男子の友人数が女子に比べて少ないことが、5年生、6年生を通じてみられた点は特徴的であった。

b. 学校外の交友関係での被選択者数

学校外の友人数は、表9と表40との比較で塾種間の違いが検討できる。それによれば、珠算塾に比べて学習塾の通塾者の方が、学校外での友人数が少ない傾向がみられる。その傾向は、5人選択の割合及び2人、1人の選択者数の割合で一貫したものであった。

c. 塾の交友関係（仲良し）での被選択者数

塾の仲良し関係で選ばれた人数の塾種間比較は、表10と表41による。これによれば、明らかに学習塾での友人の選択数が少ない。学年差、性差については、塾種間でとくにとりあげるべき特徴は認められない。

d. 塾の交友関係（教え合い）での被選択者数

塾での教え合いに関する友人数の塾種間比較は、表11と表42による。ここでも仲良し関係と同様、学習塾での選択数が珠算塾に比べて少ない傾向が認められた。学年差、性差については、ここでとくにとりあげる点はない。

e. 各基準を通しての被選択者数に関する塾種間比較

学校内の友人数は、珠算塾、学習塾とも大きな差はなく、いずれも5人制限枠一杯に記入するケースが多い結果であった。しかし、学校外と塾の2基準では、一貫して珠算塾の方が人数が多い傾向が認められた。すなわち珠算塾へ通う児童の方が放課後や近所での友人数が多く、塾での友人も多い傾向が認められたのである。ただし学習塾での友人数も、少なくとも過半数の者は3人以上の記入をしており、交友機会が非常に少ない訳ではない。学年差、性差については、ここでとくにとりあげる問題はない。

(3) 被選択者の内訳の塾種間比較



#### a. 学校内の友人の属性

学校内の友人の属性の塾種間比較は、表12と表43とによる。これによれば、全体的には塾種間に大きな差は認められなかった。しかし、珠算塾にみられた、学年上昇に伴う交友のひろがり、学習塾ではみられなかった。性差は両結果でともにみられなかった。

#### b. 学校外の友人の属性

学校外の友人の属性についての塾種間比較は、表13と表44による。珠算塾では学習塾と比べて、同クラス・同性の友人の割合が大きい結果であった。ただし、同学校・同学年・同性を多く選んでいる点については、両塾種間で違いはない。又学習塾では珠算塾に比べて、下級生をやや多く選ぶ傾向が認められた。異年齢交友は学習塾通塾者の方が割合が大きい。その中では下級生が多く選ばれたのは珠算塾と同様であった。総じて学習塾に通う児童の交友にみる属性の方が多様であるように判断された。

学年差、性差については、各塾種で幾つかの点が指摘されたが、ここではとくにとりあげるべき点はない。

#### c. 塾の友人（仲良し）の属性

塾の仲良し関係についての塾種間比較は、表14と表45による。そこではまず、同学年・同性が多く選ばれるという共通の傾向が認められるが、学習塾では別の学校の同学年・同性が $\frac{1}{4}$ をこえる割合で選ばれているという特徴があった。珠算塾でのその割合は2.5%と学習塾の $\frac{1}{10}$ にすぎない。学習塾では、そこでのみ可能な新しい交友関係が成立しうることを示唆する結果であった。

一方、異学年との交友は、塾の指導形態との関係から、珠算塾で多い結果であった。能力別による年齢混成の指導条件が、異年齢交友を促す原因となっている事がうかがえるであろう。

学年差は両塾種ともに小さいものであった。性差は学習塾でみられたが、ここでとくには論及しない。

#### d. 塾の交友関係（教え合い）の属性

塾での教え合いによる友人関係の塾種間比較は、表15と表46とによる。

珠算塾、学習塾ともに、同学年・同性の友人が多い点では共通しているが、学習塾では、先の塾の仲良し関係と同様、別の学校から1/4に近い者が選ばれている点が特徴としてみられた。

一方、異学年との交友は、これも塾の仲良しと同様、珠算塾で多い傾向がみられた。これは塾の指導形態が主要因であろう事は、先と同様である。

学年差、性差については、塾種間で多少の特徴がみられた。

#### e. 各基準間の被選択者の属性の相違に関する塾種間比較

珠算塾と学習塾との主な相違は、珠算塾では異年齢交友の機会がより多い点であり、学習塾では別の学校の児童との交友の機会が多い点であった。後者の点は、幾つかの学校の児童が通うという条件がなくては、学習塾といえどもそれをみる事はできない。しかし、同様に別の学校の者同士の集まる珠算塾に比べて、この種の交友関係がより多く成立した点は興味深いものである。

一方、珠算塾での結果は、その指導形態によっていると考えられる。異年齢の混成を前提に指導することが可能な教育内容による特徴が、交友関係のタテへのひろがりに影響している例といえよう。

#### (4) 選択の内訳の塾種間比較

##### a. 学校内の友人の内訳

塾種間での学校内の友人の内訳の比較は、表16と表47による。これによれば、学年差、性差等に多少の違いは認められるが、全体的傾向については珠算塾、学習塾間で著しい差は見出されなかった。

##### b. 学校外の友人の内訳

学校外の友人の内訳に関する塾種間の比較は、表17と表48とによる。双方ともにどういった属性の友人が多いかについては類似の傾向を示した。ただし、同学校・下級生・同性については、学習塾の児童の方が多く回答をした。

学年差では、珠算塾、学習塾通じて、6年生で同学校・下級生・同性を多くの者が選ぶ傾向を認める事ができる。性差についてはとくにここでとりあげるべき点は見出されなかった。

##### c. 塾の友人（仲良し）の内訳

塾の仲良しの関係の塾種間比較は、表18と表49とによる。双方ともに同学校・同学年・同性から多くを選んでいる。しかし珠算塾の方が学習塾に比べて、同クラスからの選択が多い。これは、珠算塾の交友の方が、学校内の交友関係と強い関連性をもつのではないかという示唆を与える資料といえよう。又、学習塾では、別の学校の友人との交わりが珠算塾に比べて明らかに多い傾向が認められた。一方、珠算塾では、異年齢交友が学習塾に比べて多く生起しうる傾向が認められたのである。

学年差、性差については、それぞれの特徴は個別に言及したとおりである。

#### d. 塾の友人 (教え合い) の内訳

塾での教え合いに関する交友関係結果の塾種間比較は、表19と表50とによる。同学年・同性が多く選ばれる事は両塾種間共通である。しかし、珠算塾では異学年間での選択が多くみられ、一方学習塾では別の学校からの選択が多くみられる結果であった。学年差、性差については、とくに言及すべき事項は見出されない。

#### e. 各種選択基準間の相違に関する塾種間比較

児童の交友関係では、各基準を通して同学年・同性が選ばれる事が多い。ただし、交友の場面別の特徴も比較的明らかに示された。すなわち、学校内ではクラス内の交友が中心となり、学校外では異年齢交友の機会が増す。又、塾では異クラスの友人との交友の機会が増すのである。塾種別にさらに特徴がみられ、珠算塾ではそこでも異年齢交友の機会が、学校外ほどではないにしろ見られ、一方、学習塾では別の学校の同学年・同性との交友機会が増すという結果がみられたのである。

#### (5) 各選択基準間の被選択者の一致人数の塾種間比較

##### a. 学校内の友人と学校外の友人の一致

学校内、学校外の2基準間での友人の一致についての塾種間比較は、表20と表51とによる。それによれば、いずれも3人～1人の一致が多く、塾種間で大きな差は見出されなかった。学習塾では学年差、性差がみられたが、珠算塾ではそれは見られなかった。

**b. 学校内の友人と塾の友人（仲良し）の一致**

学校内の友人と塾の仲良し関係の一致についての塾種間比較は、表21と表52による。これによれば、学習塾の方が友人の一致人数は少ない傾向がみられた。すなわち、珠算塾に比べて学習塾では、学校内とはかなり異なった人との交友関係が成立している事がうかがえたのである。

**c. 学校内の友人と塾の友人（教え合い）の一致**

学校内の友人と塾の教え合い関係の塾種間比較は、表22と表53とによる。この違いは、塾での結果が表52と類似していた事により、先のbでの検討内容と似た傾向であった。

**d. 学校外の友人と塾の友人（仲良し）の一致**

学校外の友人と塾の仲良し関係の塾種間比較は、表23と表54による。ここでは先のbでの検討と同様、学習塾の友人との一致人数は珠算塾とのそれと比べて少なく、珠算塾に比べて学習塾の方が学校外での友人とはより違った交友関係を形づくっていることをうかがわせる結果をみたのである。

**e. 学校外の友人と塾の友人（教え合い）の一致**

学校外の友人と塾の教え合い関係の塾種間比較は、表24と表55による。ここでは明らかに学習塾で一致人数が少ない結果が見出される。学校外の友人と塾で教え合いをすることは、学習塾では珠算塾よりもさらに少ないことが示されたのである。

**f. 塾の友人での仲良しと教え合いの一致**

塾の友人に関する2基準の選択の一致度の塾種間比較は表25と表56とによる。これによれば、珠算塾、学習塾ともにその全体的傾向は非常に類似した結果であった。すなわち、一致人数は被調査者により差があり、0～5人の各人数にわたっている事、そしてその一致度は、同じ塾内の友人でありながら必ずしも高くなく、基準による交友関係の分化がみられた事が共通して示されたのである。

**g. 各基準間の一致を通しての塾種間の比較**

珠算塾と学習塾での各基準間の友人の一致については、学校内、学校外の友人と塾の友人とが、学習塾では別々の者から構成される割合が大きい

という特徴的な結果が示された。一方、珠算塾でも学校内、学校外の友人との一致度は高いものではないが、学習塾に比べるとやや多く学校内、外の友人関係がそこにもちこまれていることをうかがわせる結果が示された。

又、塾事態での仲良しと教え合いという2基準間での一致度は珠算塾、学習塾共通して他の基準間のそれよりは高いものであったが、必ずしも十分に一致していた訳ではない。同じ塾内でも基準によって別の交友関係が成立している事を示す結果であった。

#### (6) 選択理由の内訳

##### a. 学校内の友人の選択理由

学校内の友人の選択理由の塾種間比較は表26と表57による。これによれば、珠算塾で「同情・愛着」がやや多く、学習塾では「尊敬・共鳴」がやや多いという相違がみられた。ただし全体的な傾向として、大きな差があるとまでは判断する事のできない結果であった。

##### b. 学校外の友人の選択理由

学校外の友人の選択理由の塾種間比較は表27と表58とによる。珠算塾では、全体的に「同情・愛情」が多いのに対し、学習塾では「尊敬・共鳴」が多い。「相互的接近」は双方ともに30%程度の割合を占める結果であった。

##### c. 塾の友人（仲良し）の選択理由

塾の友人の選択理由の塾種間比較は表28と表59とによる。これによると全体的傾向は珠算塾、学習塾で類似した結果であった。学年差は塾種間で多少の違いがみられたがそれは先に個別に記述した。性差は両塾種ともに小さいものであった。

##### d. 塾の友人（教え合い）の選択理由

塾の友人の選択理由の塾種間比較は表29と表60とによる。両結果ともに「同情・愛着」が最も多い点は類似していた。しかし、珠算塾の方が「相互的接近」の割合がやや多く、一方学習塾は「尊敬・共鳴」の割合がやや多い結果がみられた。

学年差・性差はともに小さい結果である。

e. 各基準における選択理由の比較

珠算塾と学習塾にみる友人の選択理由は2, 3の点で興味深い差が認められる。すなわち, 学校内・学校外の2基準で, 珠算塾では「同情・愛着」への回答が相対的に多かったのに対し, 学習塾では「尊敬・共鳴」がやや多い傾向がみられたのである。田中(1979)の研究結果に対比すれば, 珠算塾でのこの結果は学年相応のものであるが, 学習塾の結果は, やや高い学年の結果に共通する所が多いように思われた。ただし, 学習塾の結果では, 学校外の交友について「相互的接近」が多く, 一概に田中(1979)の結果と同じものと断ずる訳にはゆかない。

又, 塾の交友では珠算塾, 学習塾ともに「同情・愛着」の比率が2つの基準で常に高い結果がみられた。珠算塾での「尊敬・共鳴」の少なさは, 友人関係の発達が相対的に遅れている事をうかがわせる結果であった。

(7) 被選択者属性別選択理由

被選択者属性別の選択理由は, 珠算塾では表30から表36, 学習塾では表61から表66に示されている。しかしそこでの結果は各基準を通して合計されており, 又塾種間で個別に比較をする事が重要な意味をもつものでもない。そこで属性別の塾種間比較は行なわない。

しかし, それでも珠算塾と学習塾とでは結果に多少の違いがみられる。たとえば学習塾の方が, 同学校・同学年の友人選択理由として「尊敬・共鳴」をやや多く選ぶ傾向がある点, 同じ学校の異学年では上級生, 下級生ともに「相互的接近」を多く選ぶ傾向のある点などをあげる事ができる。こういった結果の差は被調査者の質の2塾種間での違いを示唆するものと考えることができよう。

## ま と め

本調査の結果は以上のように分析され考察された。終りに塾の交友関係を中心に主要な知見を項目に分けてまとめることとする。

a. 珠算塾, 学習塾ともに交友関係成立の機会が多い。

表3, 表4にみるように, 多くの塾は年間200日をこえる指導がなされ

ている。その間の塾への往復と毎日1時間弱の学習時間を相当数の児童が共に過ごすのである。接触機会が多いが故に、ここで交友関係が成立する機会も多いと考えられる。なお、問題の項で言及したように、仲間がいるから通うのだというような、通塾動機として友人が介在する場合はしばしばみられる事も、交友関係成立を促す1つの条件となっているのであろう。

**b. 珠算塾，学習塾ともに交友関係に地域的な広がりができる機会となっている。**

表1，表2にみるように，多くの塾は複数の学校からの生徒が集まってくる。したがって，そこに別の学校の友人ができる可能性が生ずるのである。これは学校内では期待できない形の交友関係の拡大の機会といえる。珠算塾での結果を示した表14，表15，表18，表19では，人数は数%であるが，別の学校の同学年の児童を友人として選んでいる。又，1人でも別の学校の友人を選んだ被調査者は10%近くにのぼっている。表45，表46，表49，表50にみる学習塾の結果では，別の学校からの友人の選択はさらに多く，友人としてあげられた者の1/4程度がそれにあてはまった。又ほぼ半数の被調査者が少なくとも1人は別の学校の友人をあげている。

**c. 珠算塾は異年齢交友の成立する条件をもっている。**

珠算塾は主に能力別の指導形態をとることが多い（表3）。その年齢幅は大きいものではないが，学校内交友にはこのような機会が非常に少ない。表14では珠算塾内で選ばれた仲良しの10%程度が異学年の者である。又表18によれば異学年の仲良しを少なくとも1人は選んだ者が30%をこえる数であった。

**d. 珠算塾，学習塾ともに塾生は比較的居住地に近い児童からなる。**

表5，表6，表37，表38にみるように，珠算塾，学習塾ともに近所の子どもが塾生となる事が多い。ただし，塾が学区にまたがる地点にあれば，複数の学校の児童が通塾する事も十分にある。ただし今回調査対象とした塾の間での比較では，やや学習塾の方が塾生が広い地域にわたっている傾向がみられた。

**e. 珠算塾での友人数は学校内の友人よりは少ないが，放課後及び家に**

**帰ってからの友人よりは多い。**

表8, 表9, 表10の結果から, 珠算塾での友人数は, 記入された人数で示されるように, 学校内よりは少ないが, 学校外よりは多い。すなわち, 交友成立の機会としては学校内につぐものではないかと推測されるのである。ただし調査場所が塾内であり, 友人の想起が容易であるという条件があり, 一定の留保は必要である。

**f. 学習塾での友人数は学校内, 学校外の友人数との比較では珠算塾と類似の傾向を示したが, 珠算塾に比べて, ややその人数は少ない。**

表39, 表40, 表41から, 学習塾でも珠算塾と同様, 5人選択をした者の数は学校内, 学校外の中間の値を示した。しかし表10と表41の比較にみられるように, 学習塾の方がそこでの友人数が少ない傾向をみた。これは表1, 表2にみられる塾生の人数差も一因かもしれない。又調査場所が塾であるという実施条件による留保の必要性はeと同様である。

**g. 珠算塾通塾者に比べて学習塾通塾者の方が友人数が少ない。**

表8と表39, 表9と表40, 表10と表41とを比べると, 同じ基準同士では差の大小はあるがほぼ一貫して珠算塾通塾者の方が友人数を多く記入している。その傾向は学校外, 塾でとくに大きい。学習塾通塾者の方が放課後, 家に帰ってからの友人数が少ないのである。又塾での交友人数も少ないのである。ただしこの結果は今回の調査対象となった塾間の結果であり, その一般性を主張する事はできない。

**h. 珠算塾, 学習塾ともに仲良しの人数と比べて教え合いの友人の人数が少ない。**

表10と表11, 表41と表42の比較をすれば塾での仲良しに比べて教え合いの友人数が少ないことは一貫して明らかである。学校内での調査であれば, 基準の差によるこのような大幅な選択数の違いは筆者らの経験ではみられない。塾内では教え合いといった関係での交友は少ないのであろう。学習にあたっての協同的態度を形成してゆく機会が指導の過程でも与えられることが希であるのかもしれない。

**i. 珠算塾, 学習塾ともに少数ながら孤立傾向のある児童がみられる。**



**その傾向は、やや教え合いという基準の方で大きい。**

少数ではあるが友人の記入のない児童を塾では見出した。これは学校内の交友ではみられない結果である。学校外では、珠算塾で少数みられたが、学習塾ではそのようなケースは0であった。選択数0の児童は、ソシオメトリックテストでいう被選択0の孤立児と同じとはいえないが、孤立的傾向をもった児童という表現が相当あてはまるであろう。通塾の地域的、年齢的広がり存在がこのような資料としてあらわれたのかもしれない。いずれにせよ、こういった傾向性については指導上の配慮が必要なことはのべるまでもない。

**j. 塾の友人は、珠算塾、学習塾ともに同じ学校の同学年・同性の者の占める割合が最も大きい。ただし、クラスでは、同クラスより異クラスの友人が多い。**

表14, 表15, 表45, 表46に示されるように友人としては、同学校、同学年の者の選択が多い。しかしクラス別にみると珠算塾、学習塾ともに異クラスの友人の方が同クラスの友人よりも多く選ばれている。学校内の友人は同クラスの者が多いという結果とは対照的である。

**k. 学習塾では同じ学校内の友人の占める割合が珠算塾に比べて小さい。**

表18, 表19, 表49, 表50にみられるように塾での友人を少なくとも1人は同じ学校の中から選ぶ割合が珠算塾に比べて学習塾の方が小さい。これは通塾時間などにみる学習塾の通塾圏の相対的広域性が関連しているように思われる。

**l. 珠算塾の友人は学校内の友人との一致度の方が放課後及び家に帰ってからの友人との一致度よりは高い。**

表21, 表23にみられるように、各基準間の一致度は高いものではないが、相対的には珠算塾の友人は学校内の友人の方が学校外のそれとよりはより一致する傾向をみた。これは珠算塾での交友関係は、学校内でのそれとの関連性が学校外のそれよりも高いことを示すものである。

**m. 学習塾の友人は、学校内、放課後及び家に帰ってからの友人との一致度が低い。**

表52, 表54にみられるように半数程度又はそれ以上の児童が, 学習塾内での友人と, 学校内や学校外のそれとの間に一致がないという回答をしている。学習塾での交友関係は, そこで他の場面とは独立に成立するものが多いのではないかということを示唆する結果といえよう。

**n. 珠算塾, 学習塾ともに, そこでの仲良し関係と教え合いの関係との一致度は必ずしも高くなく, 基準による選択の分化がみられた。**

表25, 表56では塾という同じ場面での仲良しと教え合いという2基準間での結果の一致度が必ずしも高いものではない事が示されている。これらの結果は, 他の基準間よりは場面が同じだけに高い一致度なのであるが, それはあくまで相対的なものである。基準によって交友の相手は区別され分化している事が塾でもみられるという事を示す結果であった。

**o. 珠算塾での友人関係成立の契機は, 「同情・愛着」と分類される内容のものが多く, 全体的に, 被調査者の発達段階に相当する結果を示した。**

表28には友人選択の理由がまとめられている。ここでは「同情・愛着」が最も多くあげられている。その他にカテゴライズされた理由についての結果とあわせて, 田中(1979)での対応する学年の結果と比べるならば, 「相互的接近」がやや多いが, 全体的に類似の傾向であった。

**p. 珠算塾での友人関係の成立では, 「相互的接近」の多い, 放課後, 家に帰ってからの友人とは違った契機があることが推測される。**

表27と表28との比較によれば, 学校外の友人は「相互的接近」の契機が珠算塾のそれに比べて多い。この2つの事態での友人の一致度の低さ(1で言及)ともあわせて, 珠算塾へは近所の友だちが連れだってくるという形は多くない事が推測されよう。

**q. 学習塾での友人関係成立の契機では「尊敬・共鳴」が「同情・愛着」について多い。全体的に被調査者の年齢の一般的な発達段階よりやや高い年齢に相当する結果である。**

表59によれば友人選択の理由で学習塾では「尊敬・共鳴」が30%をこえる割合で示されている。これは田中(1979)での結果と比較すれば, やや

今回の被調査者の場合の方が発達的に高い年齢の者と類似の内容となっている。

**r. 学習塾での友人関係の成立では、学校内、学校外の友人のそれとは違った契機がある事が推測される。**

表57, 表58, 表59によれば, 学習塾内の友人のみが「相互的接近」が契機となる事が少ない。学習塾での友人の他の事態の友人との独立性 (mで言及) は先に指摘したが, 契機のうえでも違いが認められたのである。

**s. 珠算塾と学習塾とで、仲良しと教え合いとの友人関係成立の契機には差は認められない。**

表28, 表29, 表58と表59では類似した結果を示した。被選択者の一致度は必ずしも高くはないのだが (nで言及) 選択理由については分化がみられなかった。

**t. 珠算塾内での交友内容の学年差は大きいものではない。**

珠算塾での結果全体を通して学年差をみると, 友人の属性で5年生は同クラスから選ぶ割合が6年生に比べて大きく, 逆に6年生の方は5年生に比べて異クラスから友人を選ぶ割合が大きい。すなわち, 6年生で交友範囲がやや広いことをうかがわせる結果をみた。しかしその他では, 著しい学年差は見出されなかった。

**u. 学習塾内での交友の学年差は、5年生の方がやや内容的に豊かな傾向がある。**

学習塾での交友の資料によれば友人の記入人数は5年生が多く, 又学校内, 学校外の友人との一致度も5年生の方が高い。さらに選択理由では「相互的接近」が5年生で少ないといった結果がみられた。これらはいずれも6年生で友人関係が限定されている結果につながるものと考えられる。

**v. 珠算塾内での交友は男子の方が人数が多く、女子は同クラスの者がやや多い。**

珠算塾での交友関係には幾点かにわたる性差がみられた。上記の他に選択基準間での友人の一致度の結果から, 女子学校内の友人との一致度が男子に比べて多く, 男子は女子に比べて学校外の友人との一致度が高い事が

示されている。

- w. 学習塾内では女子に比べて男子は同じ学校内の友人を選ぶ割合が大きく、女子は男子に比べて別の学校から友人を選ぶ割合が大きい。

学習塾での交友の性差は上記の形でみる事ができた。

珠算塾、学習塾での交友関係に関する資料は以上のようにまとめられた。ここでは学校内、学校外の交友の資料は主に塾の交友実態との比較データとして利用した。珠算塾、学習塾通塾者は児童一般を代表する適切なサンプルとはいえないだろう。しかしそういった留保をした上で検討するならば、この学校内、学校外のデータも児童の交友関係を一般的に理解するための一定の有効性をもった内容と考えられよう。

さて、珠算塾、学習塾での交友関係は、学校内、学校外でのそれと独立であることはないが、相当数は相異なる特徴をもったものである事が示された。又、塾の指導形態、指導内容が交友内容に影響を及ぼすことも示されたのである。

塾における指導も、児童の社会化の貴重な場面である事に留意するならば、その内容は単なる知識、技能の習得にとどまる事なく、多面的な内容をふくむべきである事は問題の項でも示した。年齢的、地域的な交友の広がりの可能性を生かしその中での協同的経験を援助する事もその一つの重要な視点であろう。

なお、本調査では学校内、学校外、塾での交友関係の「深さ」についての情報はふくまれていない。児童にとっての親友や周辺的な友人と、彼らの生活場面毎の友人選択の内容とのつき合せ等も今後必要な検討であろう。又、塾内の友人関係の安定性についても資料はない。子どもにとって今や無視し難い生活場面となった塾での交友関係の実態については今後検討すべき問題が多く残されているのである。

---

この研究は、社団法人全国珠算教育連盟からの研究奨励寄附金の一部によって行われたものである。

本研究の実施にあたり御協力をいただいた半谷珠算塾塾長半谷正司氏、谷本珠算塾塾長谷本武史氏、木曾川塾塾長清水昭氏、樋上塾塾長樋上正彦氏、港塾塾長伊藤

万一氏, ならびに被調査者の塾生児童諸君に深く感謝をいたします。又, 多面的に御援助いただいた全国珠算教育連盟理事学対委員長長野村吉彦氏, 調査にあたり仲介の労を願った全国珠算教育連盟愛知県支部支部長犬飼勝美氏, 計画にあたり貴重な御意見をいただいた名古屋大学医療技術短期大学部助教授蔭山英順氏に厚く謝意を表します。

### 文 献

- 阿部孝治 1979 塾の生活指導 珠味, 15, 30—51.
- 赤沢孝平 1972 珠算学習者の意識について 塾の手帖, 14, 23—27.
- 安藤進・佐藤芳久・寺西巖・藤島道夫・森高司 1961 珠算が嫌いになる原因について 珠算伊勢, 8, 59—74.
- 安藤進・寺西巖・佐藤芳久・藤島道夫・森高司 1963 父兄の立場からソロバン学校へ 珠算伊勢, 9, 36—46.
- 遠藤敏一 1981 授業形態を考える 塾の手帖, 31, 65—73.
- 藤本浩之輔 1974 子どもの遊び空間 日本放送出版協会.
- 深谷昌志・深谷和子 1976 遊びと勉強 中央公論社.
- 古畑和孝 1983 よりよい学級をめざして 学芸図書.
- 古市 昭 1948 児童の交友関係について 児童心理, 2—8, 62—64.
- 月刊珠算界 1974 生徒への20の質問 珠算界, 248, 4—51.
- 原田忠文・大場政行・浜野博史・高旗茂・光吉渥美・村田年夫 1980 珠算塾によせる保護者の期待 珠算春秋, 50, 93—100.
- 今津孝次郎・浜口恵俊・作田啓一 1979 社会環境の変容と子どもの発達——大人と子どもの関係を中心にして 岩波講座 子どもの発達と教育 I 岩波書店 Pp. 41—94.
- 石黒鈺二 1951 友人関係の発達——生活場面によるその変動 児童心理, 5—10, 64—73.
- 伊藤忠彦 1982 子どもにとっての塾 稲村博・小川捷之(編) 塾 共立出版 第1章 Pp. 1—17.
- 亀井定雄 1963 交友関係の変化と性格——ことに向性との関係 山口大学教育学部研究論叢(芸術・体育・教育・心理), 13—3, 53—61.
- 葛巻政男 1974 塾であること 日本珠算, 240, 2—9.
- 河合秀和・高塚雄介・楢木望・佐竹秀雄 1983 共通一次試験と現代学生気質 言語生活, 380, 2—13.
- 小林さえ 1968 ギャングエイジ 誠信書房.
- 小室庄八 1949 小学校児童の交友関係 児童心理, 3—8, 55—59.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist*. The University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢

- 正樹・中野収訳 1973 精神・自我・社会 青木書店)
- 文部省大臣官房調査統計課 1978 児童生徒の学校外学習活動に関する実態調査報告書 文部省.
- 村上敏治 1976 珠算教育と人間形成 珠算春秋, 42, 2—35.  
34—46.
- NHK放送世論調査所(編) 1980 日本の子どもたち—生活と意識 日本放送出版協会
- 西川彰 1959 塾生の実態調査について 珠研, 10, 10—11.
- 荻原辰次郎 1971 珠算教育集団と人間形成 全珠連研究発表要項, 17, 5—17.
- 岡村二郎・今泉信人・田中敏明 1978 児童期における異年齢児間交友の現状と親の態度 福岡教育大学紀要, 27—4, 67—84.
- 岡村二郎・厨義弘・今泉信人・田中敏明 1979 少年自然の家における異学年集団生活の効果及びその条件に関する研究 福岡教育大学紀要, 28—4, 85—102.
- 大森幸次郎・大森好江 1968 これからのしつけを考える——現代そろばん塾しつけ論 塾の手帖, 6, 22—49.
- 大西誠一郎 1949 学級内における友人関係——その発達と変動 児童心理, 3—8, 60—65.
- PHP研究所 1979 子どもの意識調査 PHP研究所.
- 斎藤次郎 1983 放課後の子どもたち 岩波書店.
- 阪本一郎 1949 交友関係の成立過程 児童心理, 3—5, 51—58.
- 千石保・飯長喜一郎 1979 日本の小学生——国際比較でみる 日本放送出版協会.
- 塩田芳久・阿部隆(編著) 1962 バズ学習方式——落伍者をつくらぬ教育 黎明書房.
- 塩田芳久・横田澄眞(編著) 1981 バズ学習による授業改善 黎明書房.
- 指定都市教育研究所連盟編 1976 地域社会における子どもと生活 東洋館出版社.
- 指定都市教育研究所連盟編 1979 現代の子ども意識と行動 東洋館出版社.
- 曾我和三郎 1961 生徒に対するアンケート 珠算伊勢, 8, 35—58.
- 総理府広報室 1978 子どもの意識に関する世論調査.
- 総理府青少年対策本部 1977 非行原因に関する総合的調査.
- 総理府青少年対策本部 1981 国際比較日本の子供と母親——国際児童年記念最終報告書 大蔵省印刷局.
- 末利博 1955 学級に於ける交友関係の発達についての研究 岡山大学教育学部研究集録, 1, 33—52.
- 杉江修治 1982 a 教育目標と学習課題 梶田正巳(編) 授業の心理学 第2章 黎明書房 Pp. 27—61.
- 杉江修治 1982 b 小学校における態度指導——面接調査による実態の検討 中京大学教養論叢, 23—1, 67—113.

- 住田正樹 1976 ピアグループの形成力 木原健太郎・松原治郎編 現代社会の人間形成 (現代教育社会学講座 3) 東京大学出版会, 第4章, Pp.75-101.
- 竹之下休蔵 1953 青少年の集団 教育社会学研究, 4, 1-17.
- 田中態次郎 1949 交友関係の発達の考察——児童期を中心に 児童心理, 3-8, 34-46.
- 田中態次郎 1975 新訂児童集団心理学 明治図書.
- 内山喜久雄 1953 男女交友関係の発達 教育心理, 1, 307-313.
- 上田敏見 1964a 児童の社会測定的地位の安定性に関する研究——主として与えた選択の安定性について 教育心理学研究, 12, 20-27.
- 上田敏見 1964b 児童の社会測定的地位の安定性に関する研究——主として受けた選択の安定性について 奈良学芸大学紀要 (人文・社会科学), 12, 135-153.
- 上田敏見 1965 社会測定的地位の安定性に関する発達心理学的研究 奈良学芸大学紀要 (人文・社会科学), 13, 171-181.
- 山崎俊夫 1982 子どもの勉強と学習塾の選び方 新光閣書店.
- 依田新・大橋正夫・島田四郎 1954 学級構造の研究——入学時より三年間の友人関係の調査 教育心理学研究, 2, 1-9.





3. あなたがこのじゅくで、いつもなかよくしている人の名前を5人まで書いてください。男でも女でもよろしい。クラスがちがう人でもよろしい。学年や学校がちがう人でもよろしい。

名	前	学	年	組	男, 女	わ	け	学校がちがう人には○印

4. このじゅくの友だちで、おしえてあげたり、おしえてくれたり、れんしゅうや勉強のそうだんをしあったりする人の名前を5人まで書いてください。男でも女でもよろしい。クラスがちがう人でもよろしい。学年や学校がちがう人でもよろしい。

名	前	学	年	組	男, 女	わ	け	学校がちがう人には○印

5. まえに書いたそれぞれの人と、どうしてなかがよいのか、そのわけを下からえらんでア～スまでの記号を書きいれてください。

- ア. 家が近いから\*      イ. かんじがいいから\*\*      ウ. 気があうから\*\*\*  
 エ. なかまをうまくまとめてくれるから\*\*\*\*      オ. しんせきだから\*  
 カ. やさしいから\*\*      キ. 成績, 運動などですぐれているから\*\*\*  
 ク. なかまとうまく協力するから\*\*\*\*      ケ. クラスがいっしょだから\*  
 コ. おもしろいから\*\*      サ. 考えかたや好きなものがにているから\*\*\*  
 シ. いろんな人の気もちがよくわかる人だから\*\*\*\*      ス. その他

- { \* 相互的接近  
 \*\* 同情・愛着  
 \*\*\* 尊敬・共鳴  
 \*\*\*\* 集团的協同